高岡町埋蔵文化財調査報告書第19集

高岡町内遺跡Ⅵ

2000. 3

宮崎県高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書第19集

高岡町内遺跡Ⅵ

2000. 3

宮崎県高岡町教育委員会

序　文

高岡町は、宮崎市の近郊に位置し、大規模な諸開発の増加が予想されます。高岡町教育委員会では、これらに対応するため、調査体制を整えるとともに、1991・1992年度に実施した町内遺跡詳細分布調査の結果をもとに、開発に伴う遺跡の確認を目的とした町内遺跡発掘調査を実施しております。本書は、1997～1999年度に実施したそれらの調査の報告と1996年に実施した八児遺跡発掘調査の本報告であります。この調査が、開発と埋蔵文化財の保存とが共存しうるきっかけになることを希望します。最後に、調査に御協力頂いた諸関係機関や地権者の方々に深く感謝申し上げます。

平成12年３月

高岡町教育委員会
教育長　中山芳教

例　言

1．本書は、高岡町教育委員会が文化庁・宮崎県教育委員会の補助を受けて実施した町内遺跡発掘調査の報告書である。

2．調査は下記の体制でおこなった。

調査主体	高岡町教育委員会	
教育長		篠原和民（平成８・９年度）
		中山芳教（平成10・11年度）
社会教育課長		小谷清男（平成８・９年度）
		水谷泰三（平成10・11年度）
社会教育課長補佐		梅元利隆（平成９～11年度）
兼社会教育係長		
社会教育係長		本田正雄（平成８年度）
文化財係長		黒木敏幸（平成10・11年度）
庶務担当	社会教育係副主幹	春口洋子（平成８～10年度）
	同　上	上地由紀子（平成11年度）
調査担当	文化財係　主任主事	島田正浩
	同　係　主　事	今城正広（平成８～10年度）
	同　係　嘱　託	廣田晶子（平成11年度）
調査指導	県文化課　主　査	永友良典（平成８年度）
		柳田宏一（平成９・10年度）
		長津宗重（平成11年度）
		重山郁子（平成10・11年度）

3．本書のレベルは、海抜高である。

4．八児遺跡の遺跡番号は331、注記は遺跡番号－遺構名－取上番号とし、遺物は高岡町教育委員会で保管している。

5．本書で使用した遺構表示記号は、SAが竪穴住居跡、SCが土坑（土壙）、SDが溝状遺構、Ｐがピットである。

6．本書の編集は島田がおこなった。

目　次

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 5
　1　高岡の環境 …… 5

Ⅱ　確認調査 …… 6
　1　調査概要 …… 6
　（1）平成9年度確認調査 …… 6
　（2）平成10年度確認調査 …… 7
　（3）平成11年度確認調査 …… 8

Ⅲ　八児遺跡 …… 10
　1　はじめに …… 10
　（1）調査経緯 …… 10
　（2）遺跡の環境 …… 10
　（3）調査概要 …… 10
　2　調査 …… 10
　（1）古墳時代の調査 …… 10
　（2）中世の調査 …… 28
　（3）近世の調査 …… 28

挿図目次

第1図　八児遺跡周辺地形図 …… 10
第2図　古墳時代遺構配置図 …… 11
第3図　竪穴住居跡（1・2・3号）実測図 …… 14
第4図　竪穴住居跡（4・6号）実測図 …… 15
第5図　竪穴住居跡（7・8・11号）実測図 …… 16
第6図　竪穴住居跡（5・10・12号）実測図 …… 17
第7図　土坑実測図（1） …… 18
第8図　土坑実測図（2） …… 19
第9図　古墳時代出土遺物実測図（1） …… 20
第10図　古墳時代出土遺物実測図（2） …… 21
第11図　古墳時代出土遺物実測図（3） …… 22
第12図　古墳時代出土遺物実測図（4） …… 23
第13図　中世遺構配置図 …… 24
第14図　土坑実測図（1） …… 25
第15図　土坑実測図（2） …… 26
第16図　土坑実測図（3） …… 27
第17図　中世出土遺物実測図 …… 28
第18図　近世遺構配置図 …… 29
第19図　近世出土遺物実測図 …… 30

図版目次

図版1　八児遺跡周辺　調査区全景 …… 32
図版2　調査前　全景（南から）　1号住居跡と1号溝　2号住居跡 …… 33
図版3　3号住居跡　4号住居跡　4号住居埋甕　5号住居跡 …… 34
図版4　6号住居跡　6号住居カマド　6号住居カマド煙道半截　7号住居跡 …… 35
図版5　8号住居跡　8号住居埋甕　10号住居跡　10号住居カマド完掘状況 …… 36
図版6　12号住居跡　5号溝　7号溝　34号土坑 …… 37
図版7　1号土壙　1号溝断面（北から）　出土遺物 …… 38
図版8　出土遺物 …… 39

表目次

表1　1997年度確認調査一覧表 …… 7
表2　1998年度確認調査一覧表 …… 8
表3　1999年度確認調査一覧表 …… 9
表4　出土遺物観察表 …… 30
表5　報告書登録抄 …… 40

Ⅰ　はじめに

1　高岡の環境

70%以上を山林が占める高岡町は、東側に宮崎平野を眼下にし標高170m以上の台地が西に広大に広がる。

高岡町の遺跡は、現在知られているだけで140箇所あり、それらの遺跡のほとんどは、町中央を東流する大淀川やその支流（内山川・浦之名川など）により形成された河岸段丘状に位置している。

旧石器時代では、1993年に調査を実施した向屋敷遺跡は、集石遺構と共にナイフ形石器やスクレイパーが出土している。

縄文時代の遺跡は、特に早期と後期の遺跡が多く知られており、早期は、橋山第1遺跡・天ケ城跡・宗栄司遺跡・橋上遺跡・久木野遺跡の5遺跡で、すでに発掘調査が実施されている。橋山第1遺跡は、早期と後期初頭の遺構遺物が検出された。早期は、幾形式かの集石遺構と、それに伴い、前平・塞ノ神式等の貝殻文系円筒土器や押型文土器、そして、環状石斧などが出土している。後期は、阿高系の岩崎式土器が出土している。また、多くの石錘が出土しており、当時の生活環境を知りうることができる。天ケ城跡は、標高120mの独立した丘陵に位置し、集石遺構に伴い押型文を中心とした早期の遺物が出土している。表採資料からは、山子遺跡が以前から知られており、浦之名川上流に位置する赤木遺跡と同様に後期の貝殻条痕文土器が表採される。

弥生時代では、学頭遺跡があげられる。学頭遺跡は複合遺跡であり、時期は中期後半から終末までが確認されている。また、城ケ峰遺跡では、後期の遺物が出土している。

古墳時代では、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心として遺跡が広がっている。久木野地下式横穴墓地群で3基の調査が行われており、1984年の調査では鉄斧と玉類が出土し6世紀前半とされている。また、学頭遺跡では初頭～前期にかけての遺物が出土し弥生時代から引き続き集落が営まれている。それに隣接した八児遺跡でも住居跡が検出されている。

古代は、文献によると高岡周辺は「穆佐郷」と言われていた。古代になると、宗栄司遺跡・蕨野遺跡・二反田遺跡があり前者2遺跡で調査が行われている。蕨野遺跡では、9C後半の土師器生産に伴う焼成土坑（窯）が検出されている。

中世では、12世紀に「島津庄穆佐院」といわれ、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の興亡の歴史の中に入っていく。この時代の代表的なものは山城である。南北朝期は、穆佐城が日向の中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった。それ以後、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。穆佐城は、縄張り調査により、南九州特有の特徴をもつとともに、機能分化をもたせた山城として評価されている。その後、穆佐城は、津島久豊（8代）・忠国（9代）の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど両氏の勢力争いの表舞台にあった。

この時期までの中心地が穆佐城周辺だったのに対して、近世になると天ヶ城周辺に一変する。薩摩藩は、天ケ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の裾地に多くの郷士を居住させた。そして、綾、倉岡とともに関外四ケ郷として、特に高岡郷はその中心として薩摩藩の東側の防御の要として発展する。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷士屋敷群と町屋群に分割されている。第1次調査における町屋の調査で素堀の井戸や土坑等を検出し、また1994年の調査では、武家屋敷の一画を調査している。

Ⅱ　確認調査

高岡町は、宮崎市に隣接しているにも関わらず大規模開発というものに縁遠いところである。地理的条件が良好であるわりには、宮崎市の南北に位置する佐土原町や清武町のようなベットタウン化されることはなかった。そのような開発の遅れは、法的規制によるところが大きく、それがかえって現況を破壊されることなく、埋蔵文化財にいたっては残存している遺跡も多い。しかしながら開発が全くなかったわけではなく、確実に遺跡は破壊されてきたのである。まず戦後の小規模な圃場整備や1965年頃始まったパイロット事業、そして、国道10号線バイパスを始め各種の舗装道路、官公庁の庁舎建設、民間では、小規模な宅地造成や個人の農地造成、農作物の栽培での蜜柑やごぼうなどの深耕を必要とするもの。また、近世の中心遺跡の場所に教育委員会施設であるＲ・Ｃ構造の校舎建設などである。

これらの開発は、埋蔵文化財に対する保存の意識はまったくなく、あくまでも生活利益先行の結果である。これは、文化財保護法を施行させるための体制がなかったためで、宮崎県内でそのような体制づくりがなされたのがひと昔前と考えれば、市町村レベルにおいての意識の低さは当然といえる。

さて、最近の町内の傾向は、まず、周辺市町村で見られる大規模開発は無く、小規模開発については、公共事業を中心に毎年コンスタントに事業が計画されている。町の単独事業は事業規模が小さく、地下遺構に影響を与える事業のほとんどは補助事業である。最近の傾向として農道関連の開発が増加しておりこの傾向はしばらく続くものと思われる。個人住宅に関しては、また徐々に増加傾向を示している。さらに建造物の基礎強化により、地下遺構に影響を与える工法が増加するものと思われそれらに対応するためのシステムの確立が緊急の課題であろう。

これらの開発に対しては、可能な限りの試掘と立ち会い調査で対応し、破壊される遺跡については本調査を実施している。しかし、これらも事前に計画が確認できるものについてのみの応対であり開発のすべてではない。現在のところ特に小規模な民間開発においては把握するのは困難である。教育委員会で把握できるものは、開発申請や建築の確認申請、農地転用許可によるものであり、それ以外の開発は発見時での対応となり工事の中断・工期の延長を引き起こしている。公共事業においても計画段階で協議を求めてくるのは希である。発掘調査が事業者側に課せられた義務であることを周知徹底させることと、開発に対する埋蔵文化財独自のチェック機構を早急に確立させることが必要である。また、仮にこのように開発の把握が可能になった場合、今の教育委員会の体制では対応することは困難であり、同時に受け皿の強化を図らなければない。広域的な調査協力やさらには現体制そのものの改革を必要とする時期であることに我々も気付かねばならない。

1　調査概要

（1）平成９年度確認調査

平成９年度（1997年度）は、農業関連開発事業と施設建設関連事業の対応が目立った。公共事業では農業関係の県営事業（楠見農免農道）や町主体の施設建設（体育館、公園造成）に対応した。また、穆佐城跡は公園整備のための虎口状況確認調査である。民間開発においては、葉煙草生産組合における反転客土事業で４遺跡、土砂採取や個人の土地造成において各１遺跡づつ対応した。記録保存を主体とした調査では、八久保第２遺跡で葉煙草生産組合における反転客土事業に伴う調査を実施した。

表１　1997年度確認調査一覧表

	遺　跡　名	場　所	調査区分	調査期間	原　因	成　果	開発主体	保存処置	備考
1	高岡麓遺跡第11地点	大字内山	確認調査	H 9.5.12	施設建設	陶磁器	高岡町	記録保存	
2	中ノ丸遺跡	大字高浜	確認調査	H 9.5.19～21	農道新設	遺構無	宮崎県		
3	八久保遺跡	大字上倉永	確認調査	H 9.8.27	反転客土	焼礫	組合	記録保存	
4	永迫第１遺跡	大字小山田	確認調査	H 9.8.28・29	反転客土	遺構無	組合		
5	丹後掘遺跡	大字花見	確認調査	H 9.12.1	反転客土	ピット 弥生土器	個人		
6	高岡麓遺跡第12地点	大字内山	確認調査	H 9.12.2	公園造成	陶磁器	組合	記録保存	
7	一里山第２遺跡	大字浦之名	確認調査	H 9.12.3・4	反転客土	遺構無	組合		
8	茶屋原遺跡	大字浦之名	確認調査	H10.1.6	土地造成	遺構無	個人		
8	橋上遺跡	大字浦之名	確認調査	H10.3.17	土砂採取	焼礫	民間企業	記録保存	
10	穆佐城跡	大字小山田	確認調査	H10.2.12 ～3.31	公園整備	虎口の確認	高岡町		

（２）平成10年度確認調査

平成10年度（1998年度）は、農業関連事業が中心である。公共事業は県営事業である農道関係（内山南農免農道、楠見農免農道）がそのほとんどである。民間開発は茶屋原遺跡で電力会社の鉄塔建設に対応した。開発予定地は地下式横穴墓調査地（昭和４０年代）に隣接するため、トレンチ調査の代わりに磁器レーダー探査調査を実施した。記録保存を目的とする調査は丹後堀遺跡で個人の反転客土事業、さらに橋上遺跡で個人企業による土砂採取に対応した。

表２　1998年度確認調査一覧表

	遺　跡　名	場　所	調査区分	調査期間	原　因	成　果	開発主体	保存処置	備考
1	一里山第４遺跡	大字浦之名	確認調査	H10.7.28	反転客土	遺構無	組合		
2	学頭遺跡	大字下倉永	確認調査	H10.9.10	道路整備	弥生土器	高岡町	記録保存	
3	高浜中原遺跡	大字高浜	確認調査	H10.10.5～10.9	道路新設	焼礫	宮崎県	記録保存	
4	押田遺跡	大字五町	確認調査	H10.10.9～10.20	農道新設	焼礫	宮崎県	記録保存	
5	田中遺跡	大字五町	確認調査	H11.3.18	道路新設	遺構無	宮崎県		
6	茶屋原遺跡	大字浦之名	確認調査	H10.12.14	施設建設	集石？	民間企業	記録保存	磁気レーダー探査

（３）平成11年度確認調査

平成11年度（1999年度）は、公共事業については宮崎県における農業関連事業（ふるさと農道）が中心で、諸施設建設については例年程度の規模である。農業関連事業は、そのほとんどが大淀川左岸事業に基づくもので当面は開発が続くものと思われる。公共事業における対応策は、農道については路線内でトレンチ等による確認調査を実施し、その内３地区においてはプラント・オパール分析を合わせておこなった。分析自体は開発部局負担である。民間開発については、宅地造成などの開発はなく個人住宅等の建設がそのほとんどを占める。個人住宅は増加傾向にあるが、基礎構造に応じて対応した。また、移動電話等普及に伴い電波鉄塔建設がここ数年みられる。葉煙草の客土反転事業は毎年実施されており、次年度予定地に対して12月にトレンチ調査実施している。内ノ八重第１遺跡で今年度調査した畑地は、AT層まですでに削平されており、遺構・遺物は確認されなかった。

表３　平成11年度確認調査一覧

	遺　跡　名	場　所	調査区分	調査期間	原　因	成　果	開発主体	保存処置	備考
1	高野原遺跡	大字高浜	確認調査	H11.6.29 ～7.1	農道新設	縄文土器 焼礫	宮崎県	記録保存	
2	八反田地区	大字上倉永	確認調査	H11.7.5・6	農道新設	土師器 墓地	宮崎県	記録保存	八反田遺　跡
3	内ノ花見地区	大字下倉永	確認調査	H12.1.7	農道新設	遺構無	宮崎県		
4	上新城地区	大字小山田	確認調査	H11.7.9・12	農道新設	水田	宮崎県	記録保存	上新城遺　跡
5	肱畔地区	大字小山田	確認調査	H11.7.15	農道新設	焼礫 土師器	宮崎県	記録保存	肱畔遺遺　跡
6	宗栄司地区	大字小山田	確認調査	H11.7.8 H12.1.7	農道新設	木製品 水田	宮崎県	記録保存	梅木田遺　跡
7	永迫第１遺跡	大字小山田	確認調査	H11.7.12・13	農道新設	縄文土器 焼礫	宮崎県	記録保存	
8	永迫第２遺跡	大字小山田	確認調査	H11.7.14	農道新設	縄文土器 焼礫	宮崎県	記録保存	
9	的野遺跡	大字上倉永	確認調査	H11.7.7	鉄塔建設	土師器 縄文土器	民間企業	記録保存	
10	橋上遺跡５区	大字浦之名	確認調査	H11.12.7	施設建設	縄文土器	民間企業	工事立会	
11	内ノ八重 第１遺跡	大字上倉永	確認調査	H11.12.10	反転客土	遺構無	組合		
12	内ノ八重 第２遺跡	大字上倉永	確認調査	H11.12.10	反転客土	遺構無	組合		
13	上新城遺跡	大字小山田	確認調査	H11.10.7	農地造成	ピット	個人	盛土	

Ⅲ　八児遺跡

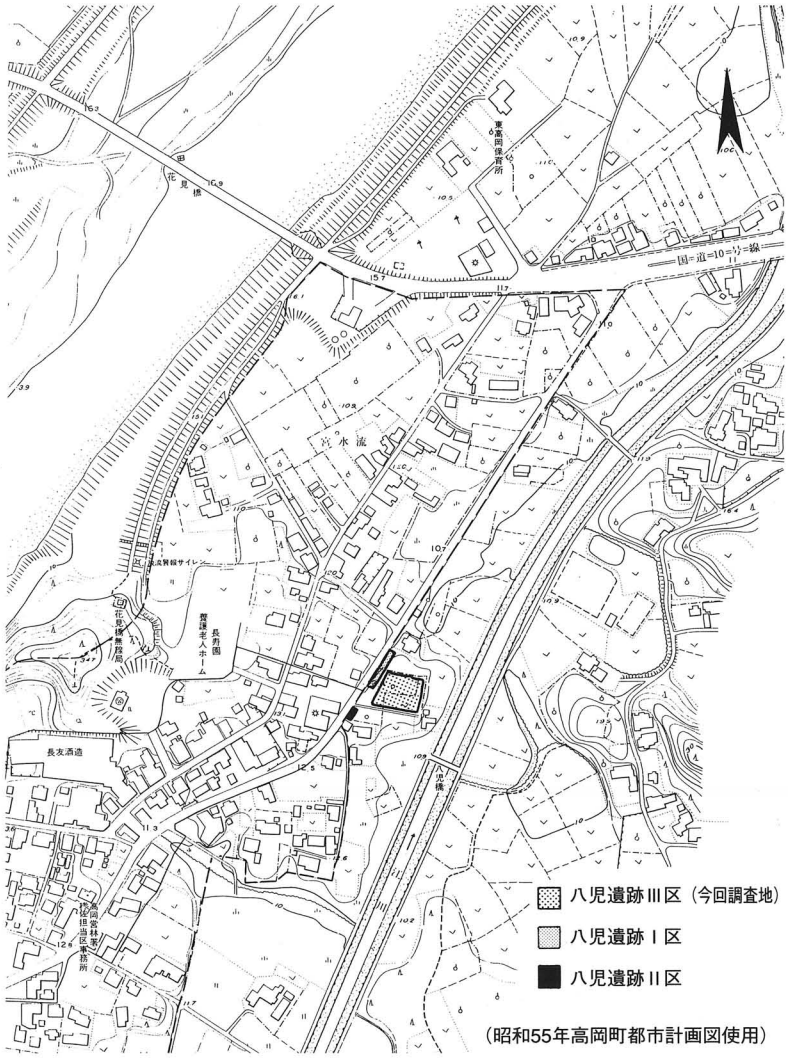
1　はじめに

（1）調査経緯

1996年７月に事業主である[redacted]から[redacted]建設に先立ち文化財の有無についての照会があった。教育委員会では建設予定地が八児遺跡の範囲に入ることを伝えて、併せて確認調査を実施した。その結果、遺構等が確認されたため、再度事業主と協議をおこなった。後日事業主から予定通り建設したいとの意向があった。そのため、教育委員会は事業主と発掘調査における委託契約を締結し11月日から記録保存を目的とする発掘調査を実施した。費用負担については、県文化課の指導のもとに病院部分においては事業主負担とし、個人住宅部分と考えられるところは国庫補助事業で対応した。

（2）遺跡の環境

今回調査した八児遺跡は、大淀川と江川によって挟まれ標高12ｍの微高地の先端に位置する。この微高地の西側には弥生時代後期を中心とする学頭遺跡、さらに、江川の東岸（宮崎市）には県指定の生目村古墳が存在する。平成２年に県道拡幅に伴い隣接地で調査がおこなわれ、７世紀前半代の竪穴住居やの11世紀後半から12世紀前半代の土壙墓等が検出されている。



第１図　八児遺跡周辺地形図

（3）調査概要

調査地は大字下倉永398、399、400、404-1番地である。平成２年調査地をⅠ区、平成４年調査地をⅡ区としていることから、今回の調査地はⅢ区とする。期間は平成８年11月５日から12月18日を要し、調査面積約1,200m²であった。検出された遺構は、６世紀末から７世紀後半にかけての竪穴住居12軒・溝２条・土坑８基、12世紀～13世紀代の土壙墓や土坑27基・溝１条、18世紀の溝４条である。竪穴住居は住居中央床面に埋甕があるものが３軒で、カマド施設が確認されたものもある。中世の土壙墓は床面に粘土を貼り付けたものが１基確認された。近世の溝状遺構は２条の溝がほぼ南北方向に並行して延びている。

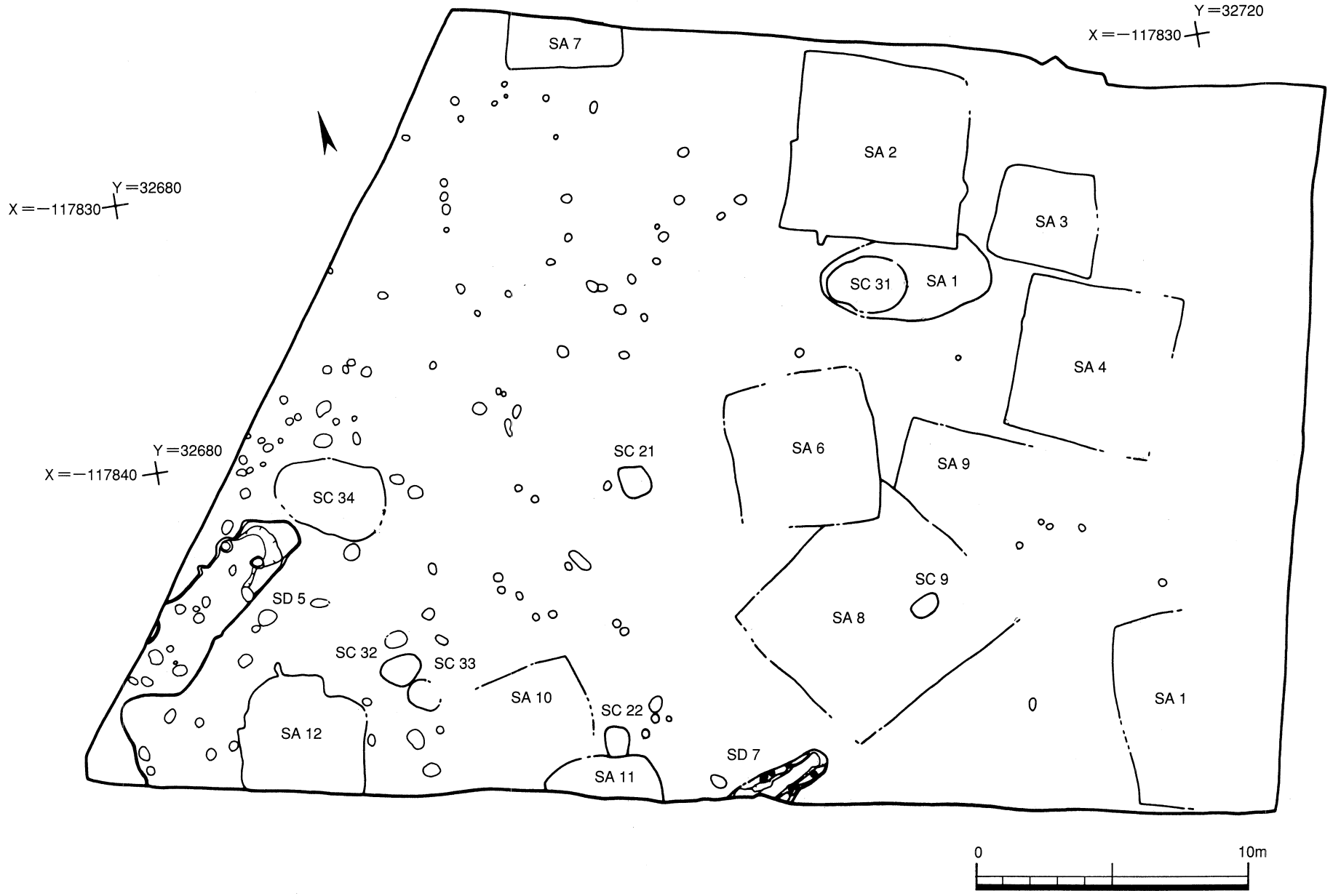
2　調査

（1）古墳時代の調査

a　竪穴住居跡

1　号住居跡

〈遺構（３図)〉　１号溝と12号土坑



第 2 図　古墳時代遺構配置図

に切られ西側半分だけ残存する。西側壁南北方向に長さ約6.6mを計る。柱穴はＰ１とそれに対応するＰ２があるがＰ２は１号溝により切られておりほとんど残存しない。中央には深さ20cmほどの土坑があり焼土が堆積していた。

〈遺物（９図１・２)〉　１と２は甕で中央土坑内から出土した。

２号住居跡

〈遺構（３図)〉　５号住居址を切る。北西側壁長さ約6.6mを計り、方位はN-18°-Eである。北西側壁が南側半分から西側にカギ状に張り出る。柱穴はP2以外のピットは深さ20cm前後で浅く住居跡に伴う柱穴かどうかは疑問である。P1東側で１m四方に焼土が広がって堆積していたが、床面が焼けた様子はない。軽石製の支脚が出土したことから北側壁面にカマド施設が存在したものと推測されるが構造はわからない。

〈遺物（９図３～11)〉　住居跡内北西側に集中している。３は須恵器杯蓋である。４は杯か埦の形状である。５は胎土が精良である。６は有脚の鉢もしくは埦である。９は小型の鉢で10を大型の鉢とした。

３号住居跡

〈遺構（３図)〉　２号住居跡の東側にある。北西側壁長さ約3.5m、南西側壁長さ約3.9mで小規模である。方位は北西壁N-26°-Eである。柱穴はＰ２以外のピットは深さ20cm前後で浅い。Ｐ２のすぐ北西側（北西壁中央よりやや東寄り）に焼土が0.5m四方に広がり堆積する。カマド施設が存在したものと推測されるが構造はわからない。

〈遺物（９図12)〉　12は胎土が精良であり甕や鉢類の胎土とは異なっており、壺の口縁部と思われる。

４号住居跡

〈遺構（４図)〉　東側を１号溝に切られる。北西側壁や北東側壁の長さ共に約5.65mを計る。方位は北西壁N-22°-Eである。柱穴はＰ１に対応するものがＰ４と思われるがやや浅い。また、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４の並びになるのであれば、Ｐ５とそれに対応するＰ６も考慮しなければならない。埋甕は中央床面に据えられ、甕外面に接するところは２～３cm幅で赤化している。甕内埋土からは粒子状の炭化片が少量確認された。カマド施設は片袖のみ残り、焚口付近には楕円形ピットがある。袖部からピットにかけては焼土が浅く堆積し軽石製の支脚が出土した。袖部は地山土で成形されており内側と上面が赤化している。住居壁面は袖部より内側35cmほどが強く赤化している。

〈遺物（９図13)〉　13は埋甕として使用されていた。胴部中央が張る形状で壺の形状と区別がつかないが胎土は粗悪である。その他に径９cm前後の円筒形で軽石製の支脚が出土している。

５号住居跡

〈遺構（６図)〉　２号住居跡に切られる。この住居跡は長軸約6.25mのタマゴ型の平面プランで、長軸方向はN-72°-Wである。柱穴は、Ｐ１以外は浅く、それに対応するものはピットにおいては見あたらない。ただし、西側に不定形の大きな土坑を伴うことからそれとの関連が考えられる。この土坑は31号で番号を付しているが埋土の堆積状況からこの住居跡の関連施設と思われる。床面は段差を有して西側が深くなり安定したものではないが、貯蔵穴的な役割を果たしたものではなかろうか。また、これらの遺構は住居跡としているが、他の住居跡と比較してプランが異なるうえに炉やカマド等の施設もないことから、居住目的以外の可能性がある。

〈遺物（９図14・15)〉　甕の口縁部と底部である。

６号住居跡

〈遺構（４図)〉　３号溝に切られ、８号住居跡を切る。方位は東壁N-7°-Eである。東側壁の長さ5.6m

で、北側壁約5.0mである。検出面から約20cm下で床面となり壁面は床面から約55°の傾斜で立ち上がり垂直ではない。柱穴はＰ１～Ｐ４が対応すると思われるがＰ２とＰ３は深さ15cm前後で浅い。さらにその内側にＰ５～Ｐ８が対応すると思われるが、（Ｐ８）は確認されていない。また、Ｐ５～Ｐ７も深さ10cm前後で浅い。埋甕は床面中央に据えられるが他の住居跡と異なり赤化していない。カマドはかろうじて両袖を残すが４号住居跡と同じように地山土で成形しているものと思われる。焚口のところには浅い落ち込みがあり、燃焼部の床面中央部には支脚を立てるピットがある。煙道は長さ約65cm、幅約24cm、高さ約11cmで断面は丸みのある長方形を呈する。煙道からつながるピットは径約30cmで、深さ約54cmあり、深さ約13cmのところで煙道上面につながる。ピット床面は煙道床面よりも深い構造となっており雨水対策かもしれない。焚口から燃焼部にかけては焼土がブロック状に堆積しており、その中から軽石製の支脚が出土し、焼土の上面からは甕が倒れた状態で出土している。焼土等の堆積状況から造りつけのカマド構造と思われる。

〈遺物（９図16～27)〉　16は須恵器で杯蓋である。17は土師器杯蓋でカマドのすぐ西側で出土した。19～24は甕である。19は口縁部が短く外反する。21はカマド焚口焼土で出土した甕底部で胴部から口縁部にかけては図化に耐えない。22は埋甕である。23は脚付きである。25と26は甑で、25は把手が付いている。27は砂岩質の敲石で５面に敲打痕がみられる。その他には須恵器甕の胴部片が数点出土している。

７号住居跡

〈遺構（５図)〉　調査区北側に位置し、遺構の半分以上は調査区域外である。南西側壁長さ約4.2mを呈し、方位は北西壁でN-22°-Eである。南西側壁に接する床面が浅く赤化しておりその周辺から遺物が確認されている。

８号住居跡

〈遺構（５図)〉　６号住居跡と35号土坑に切られ９号住居跡を切る。西壁の長さが6.5mで１２軒中最大規模である。方形プランではあるが南東側が攪乱により削平されている。方位は西壁N-28°-Wである。壁面は床面から約60°の傾斜で立ち上がり垂直ではない。西壁と東壁にベット状の遺構を設ける。西側は幅1.1m、長さ約4.0mの規模で南側でスロープ状となり床面につながる。東側は攪乱を受けており残存部で幅0.45mである。柱穴はＰ１とＰ３とした場合Ｐ２とＰ４がそれに対応するかはやや疑問である。埋甕は、床面中央に浅い落ち込みがありその端に据えられている。甕の外側に接するところは北西側で強く赤化している。

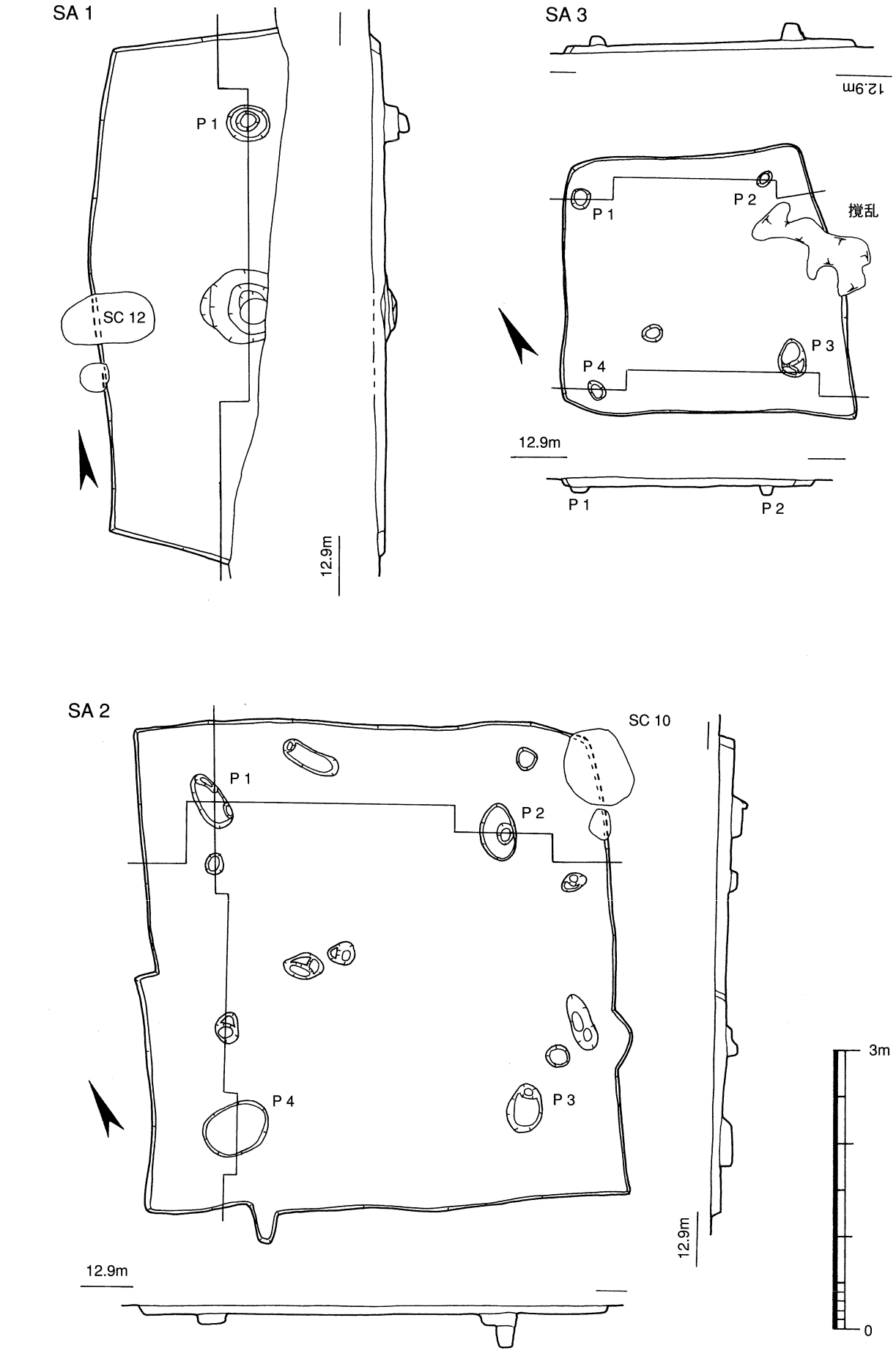
〈遺物（10図28～31)〉　28と29は須恵器で杯身であるが、28は35号土坑からの混入かもしれない。31は埋甕である。その他に脚付き甕の脚部が出土した。

９号住居跡

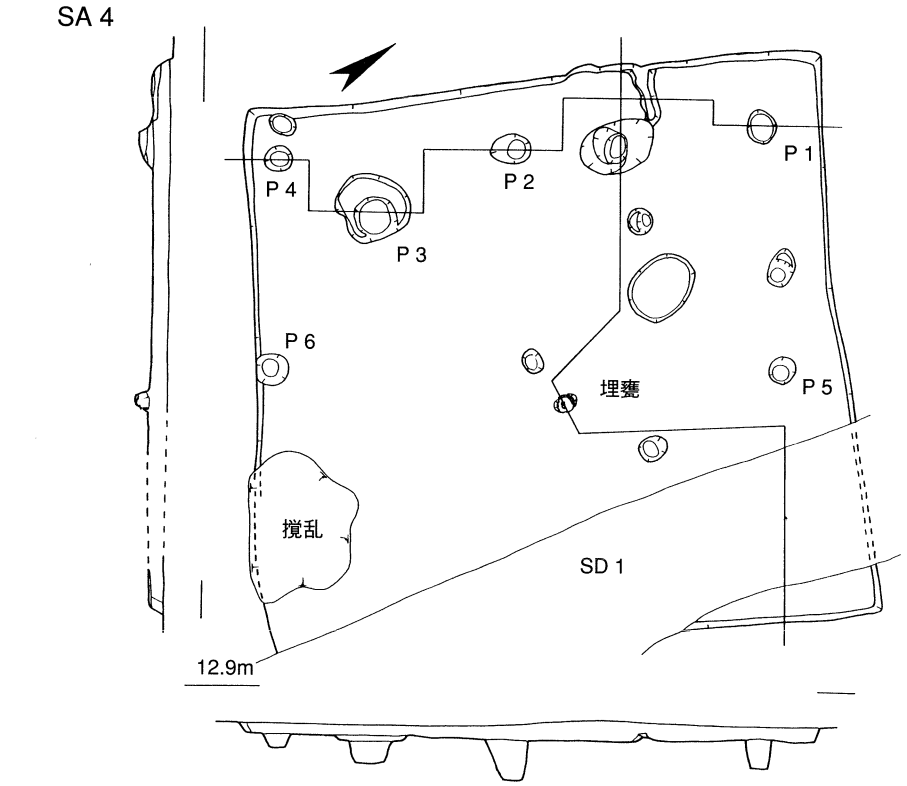
８号住居跡に切られる。方形プランになると思われるが、削平が激しくほとんど残っていないため図化していない。

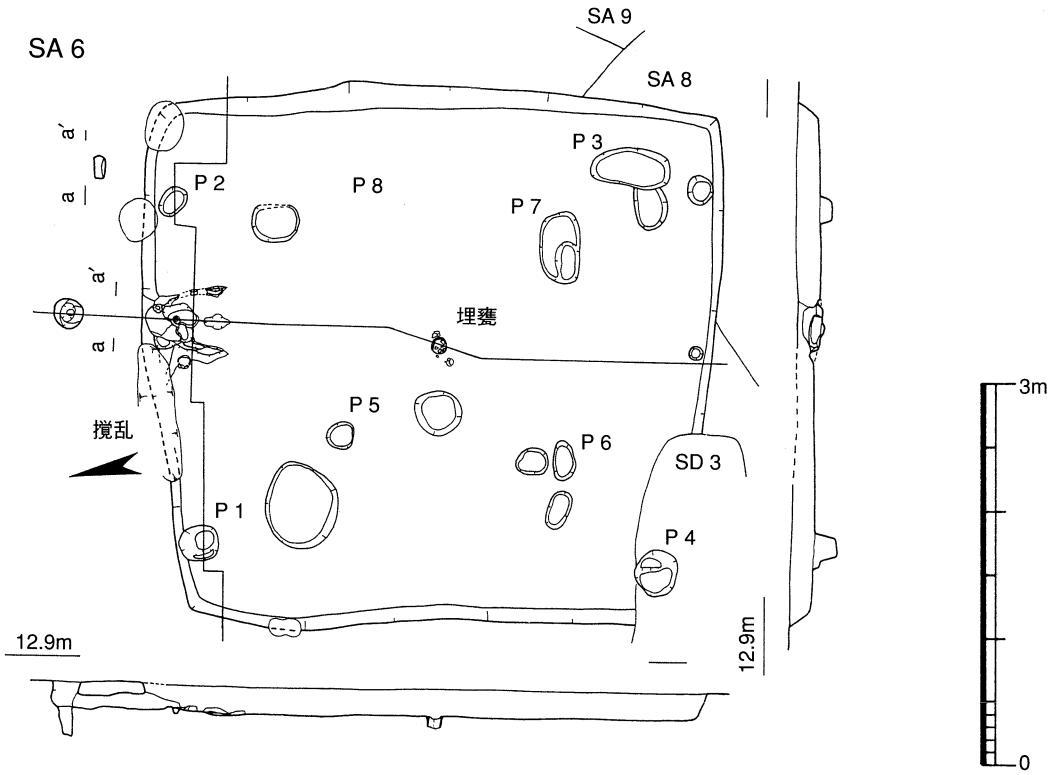
10号住居跡

〈遺構（６図)〉　６号溝に切られ、10号住居跡に対応すると思われるＰ３が11号住居跡を切る。さらに、住居跡の南側は削平されており全体形はわからない。方位は東側壁N-15°-Wである。北側壁から約1.6mのところでテラス状に１段上がる。柱穴はＰ２とＰ３が対応すると思われる。Ｐ１が対応するかどうかは西側壁と他のピットが６号溝による削平のため確認されておらずわからない。カマドは北壁をやや抉っており、浅く赤化している。燃焼部はピット状に深くなっており、両袖は確認されていない。埋土は脆い

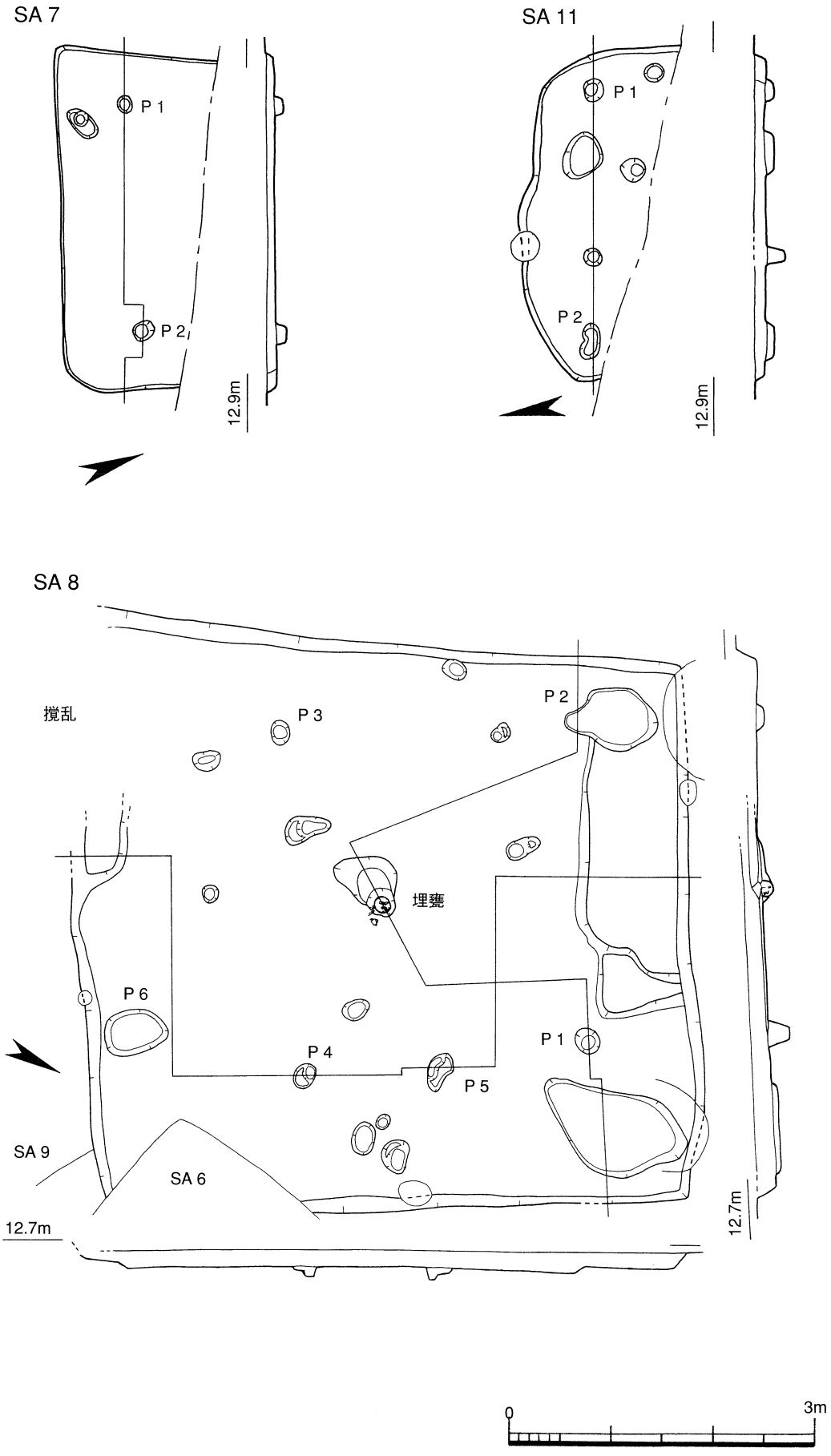


第3図　竪穴居住跡（1・2・3号）実測図

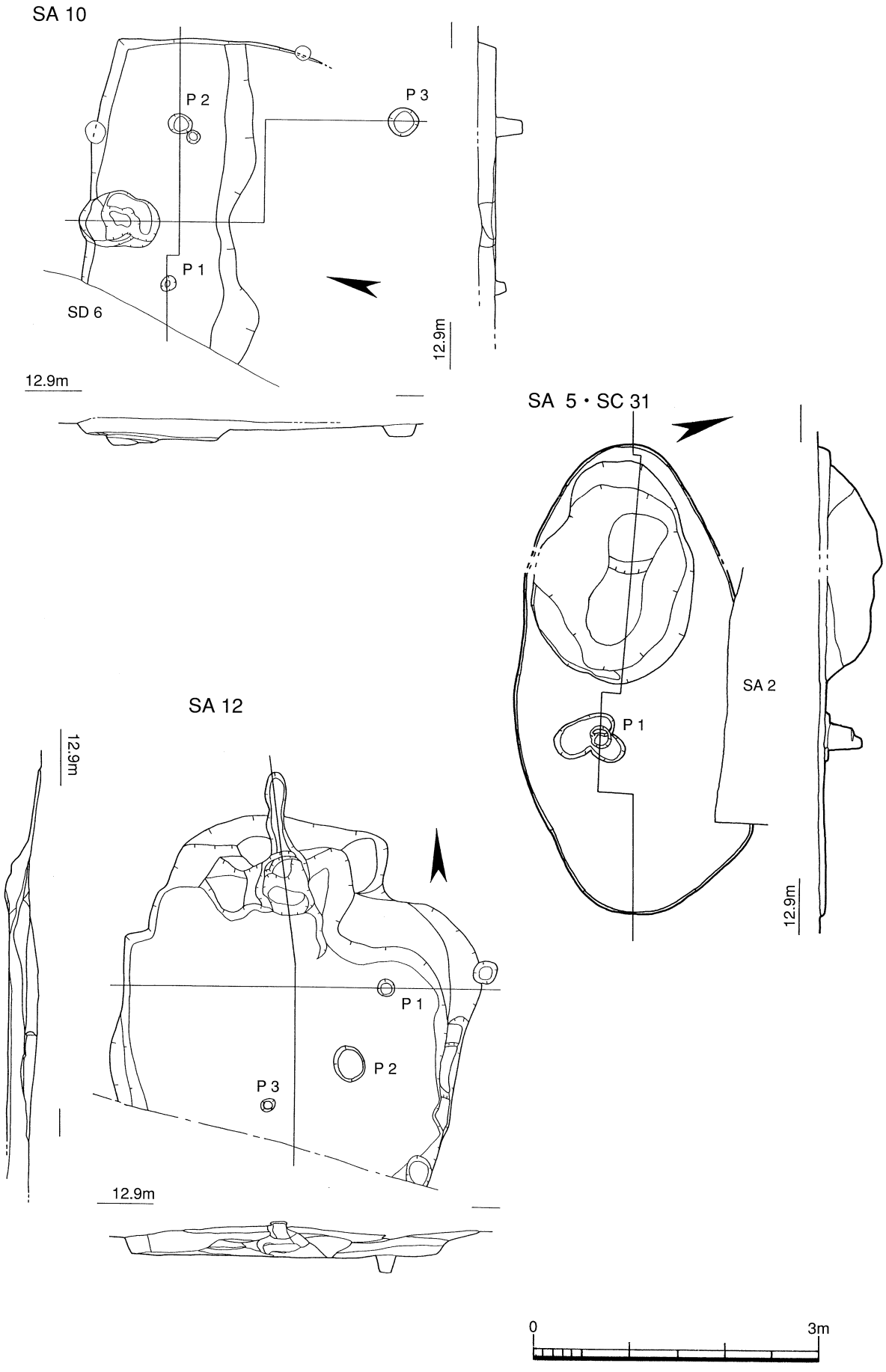




第4図　竪穴居住跡（4・6号）実測図



第5図　竪穴居住跡（7・8・11号）実測図



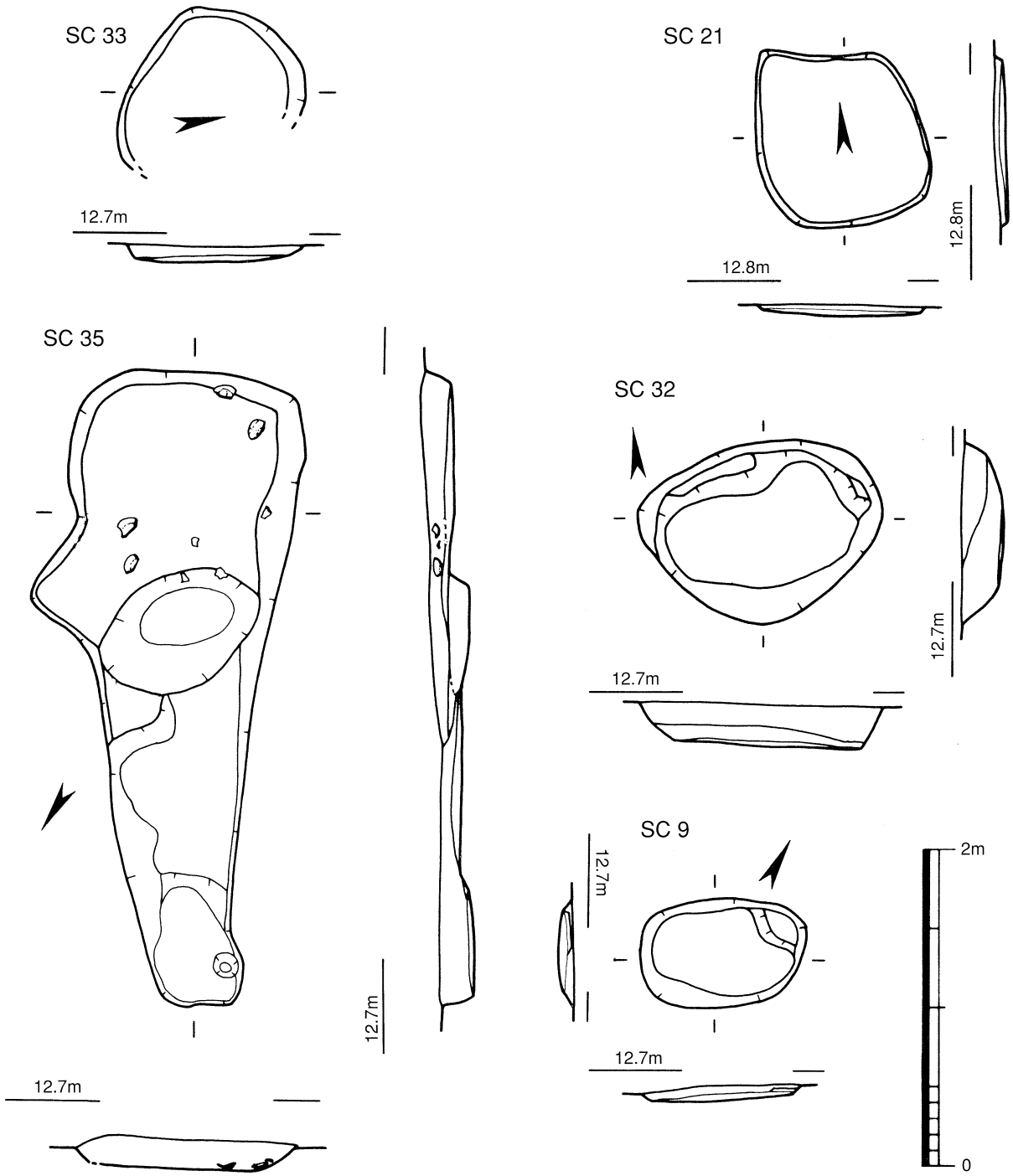
第6図　竪穴居住跡（5・10・12号）実測図

ブロック状の焼土が中心でその上に甕が倒れた形で出土した。

〈遺物（10図32～41)〉　32と33は土師器杯蓋である。34～39は甕である。34は胴部が強く張る。58はカマド焼土直上に横たわった状態で出土した。41は軽石製の支脚で計３点出土しており、そのうち１点はカマド焼土内からである。その他に須恵器としては１点だけ隼上りⅢ型式と思われる杯蓋が出土したが図化には耐えられない。

11号住居跡

〈遺構（５図)〉　22号土坑を切る。南側が調査区外で全体形はわからないが、北側壁がやや弧を描くようなプランである。そのため柱穴はどれが対応するかは不明である。



第７図　土坑実測図（１）

〈遺物（10図42)〉　隼上りＩ型式と思われる須恵器杯蓋である。その他には甕等の胴部片が出土している。

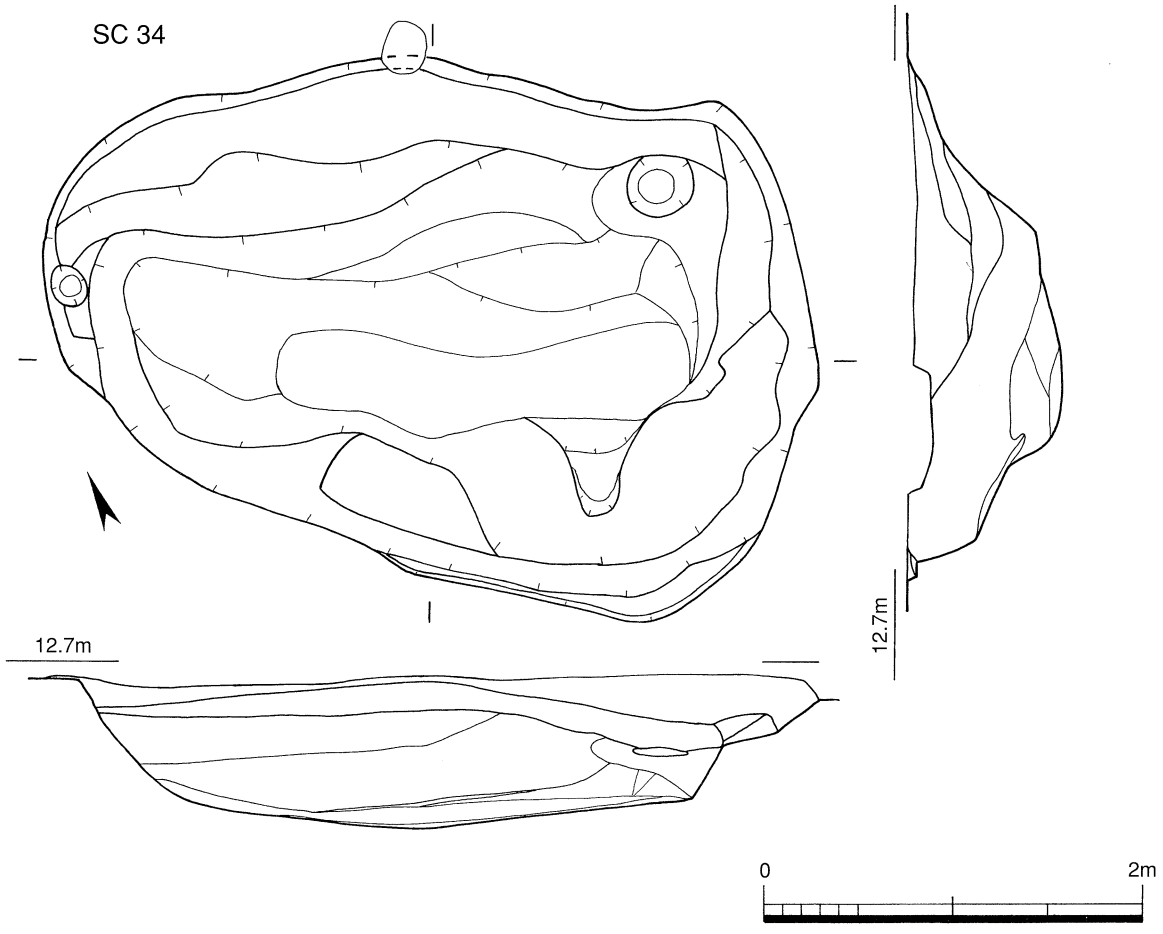
12号住居跡

〈遺構（６図)〉　南側は調査区外で全体形はわからないが、北側のカマドがあるところが突出し平面プランが凸状になる。東側壁の一部は階段状となるがその床面は硬化面ではない。方位は西側壁でN-5°-Eである。カマドの左右両側はテラス状に段を有するが、これは焚口から燃焼部となるところの地山面を掘削することで両袖部としている。そのため煙道は燃焼部から比べると高い位置にある。煙道は床面がわずかに残っている程度で長さ約1.1mで切れている。焚き口は長いピットがあり、焚口から煙道にかけては焼土が堆積する。床面のピットは３カ所検出されたが柱穴として対応するものが見あたらない。

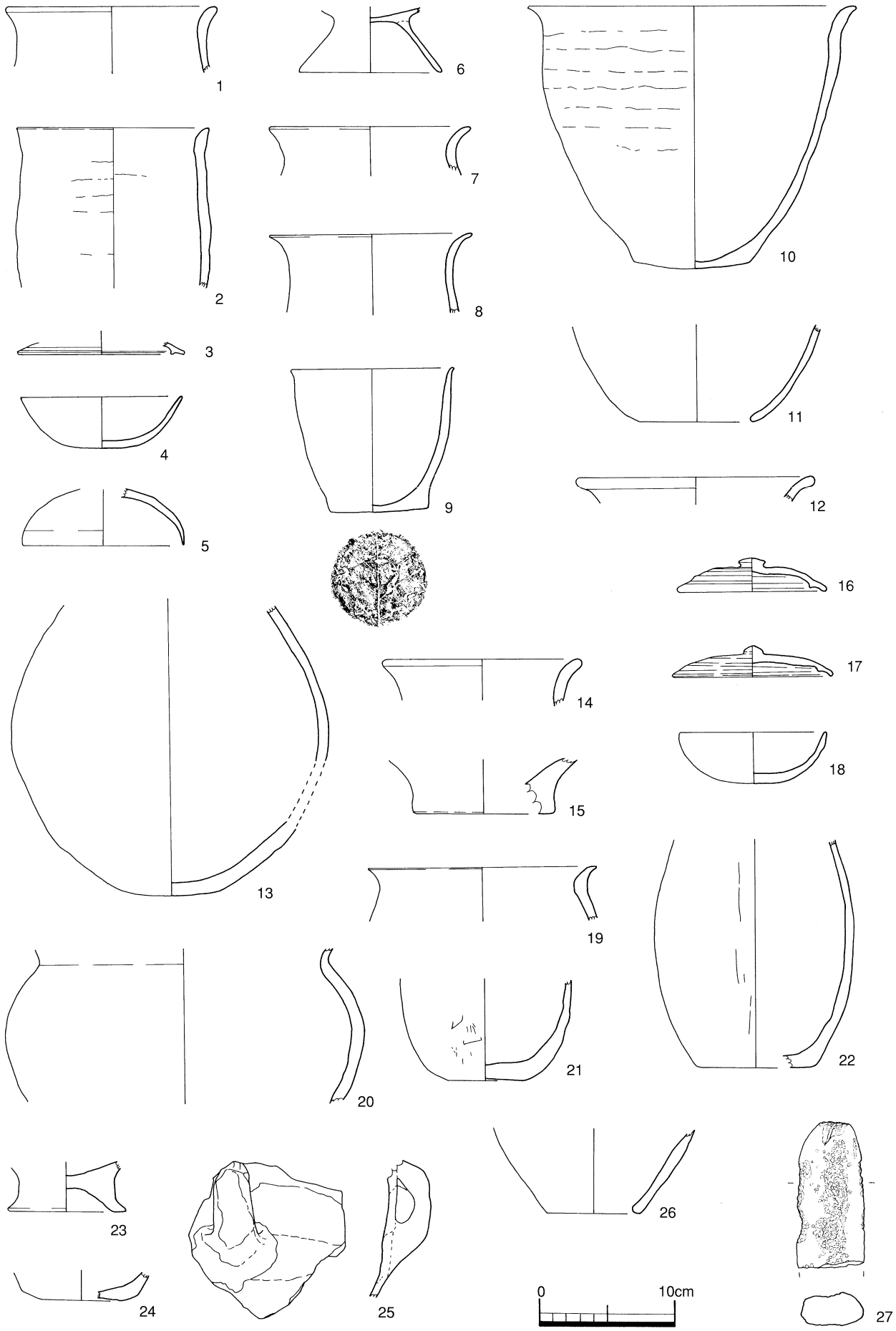
〈遺物（10･11図43～61)〉　須恵器は43と44である。44の底部はヘラ切りで口縁部から体部にかけてはヨコナデ調整である。47は皿であろう。49～56（52除く）は土師器甕である。49と50は口縁部の形状が他の甕と異なっており時期的な相違（遺物の一部流れ込み）が認められる。52と57～59は鉢である。57には粘土紐の痕跡が残る。60と61は甑で61には穿孔が認められる。その他には須恵器甕の胴部片が出土している。

ｂ　溝状遺構

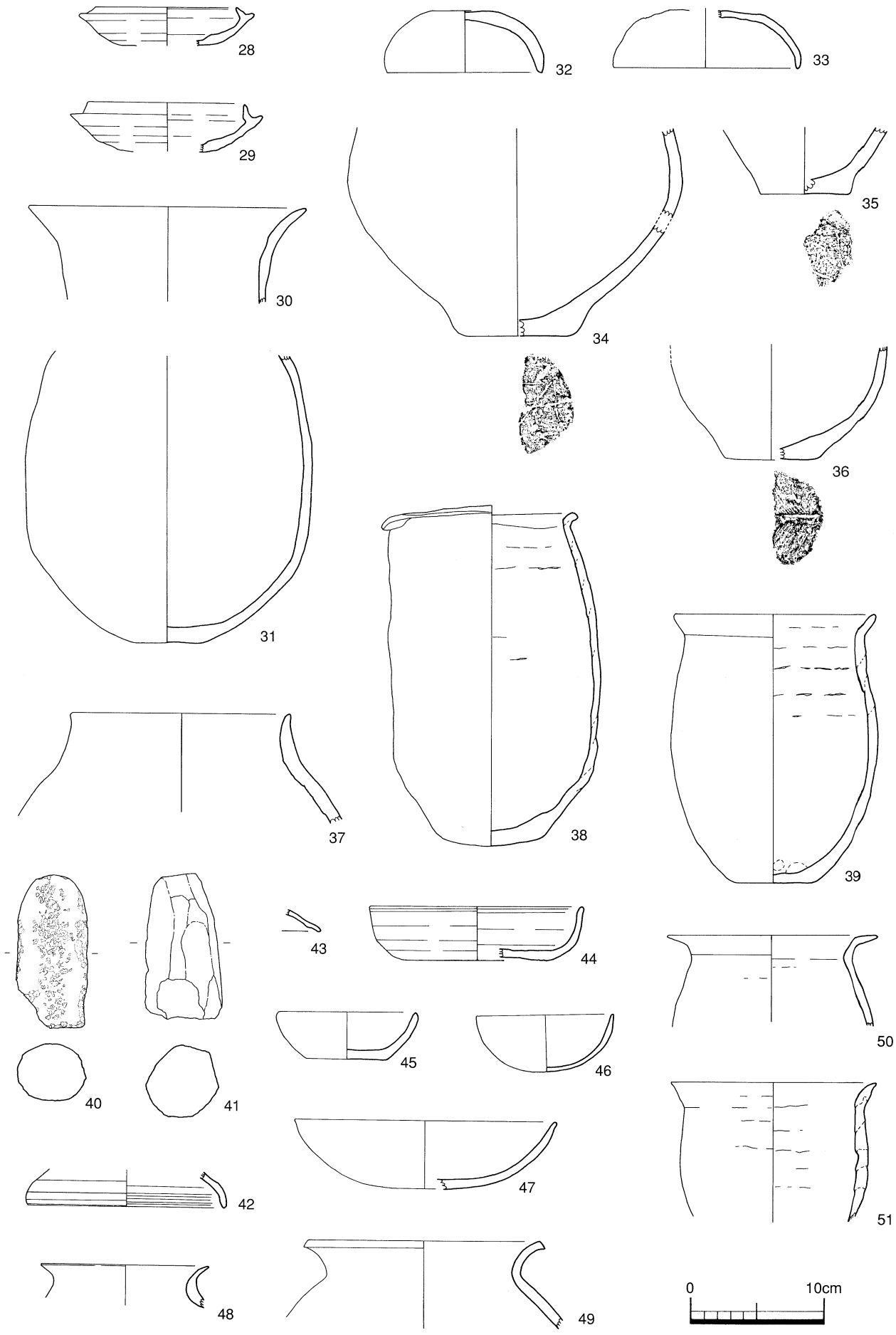
〈遺構（２図)〉　溝状遺構は５号溝と７号溝の２条である。５号溝は西側と南側が調査区外で全体形はわからないが、不定型なプランをなし、床面がやや南西側に深くなるが全体的に平坦に近く浅い。７号溝



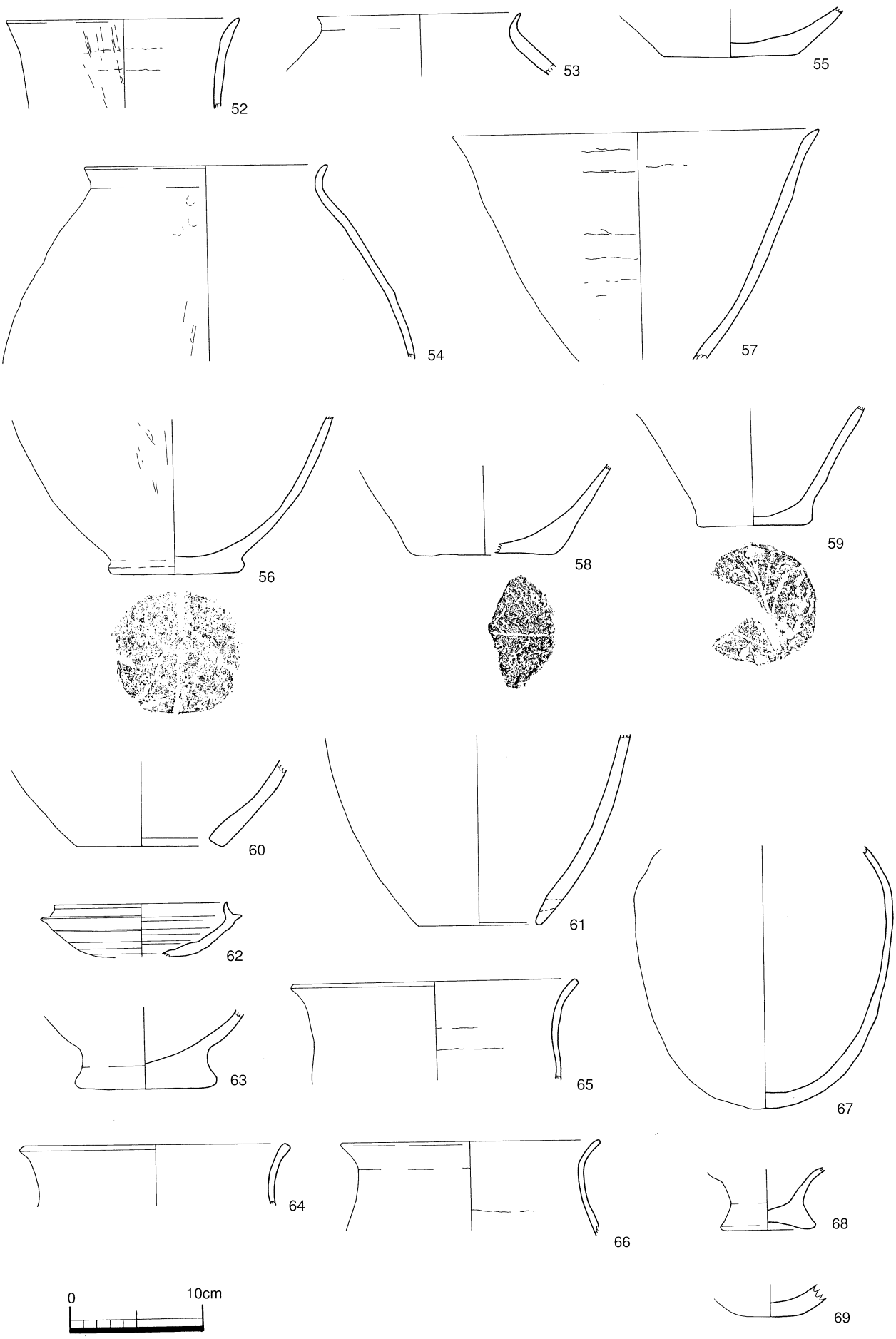
第８図　土坑実測図（２）



第９図　古墳時代出土遺物実測図（１）



第10図　古墳時代出土遺物実測図（２）



第11図　古墳時代出土遺物実測図（３）

も南側が調査区外である。幅約1.6mで両側にテラス状の段を１段有し、その段に両壁上面には小さいピットが並ぶ。床面は平坦で断面箱形となる。

〈遺物（11・12図62～78)〉　62～74は５号溝出土である。62は須恵器で有蓋の高坏である。５号溝からはその他に隼上りⅢ型式と思われる杯身があり出土遺物に時期幅がある。72～74は甑で73と74は底部が肥厚し安定している。75～78が７号溝出土である。75は片口土器である。

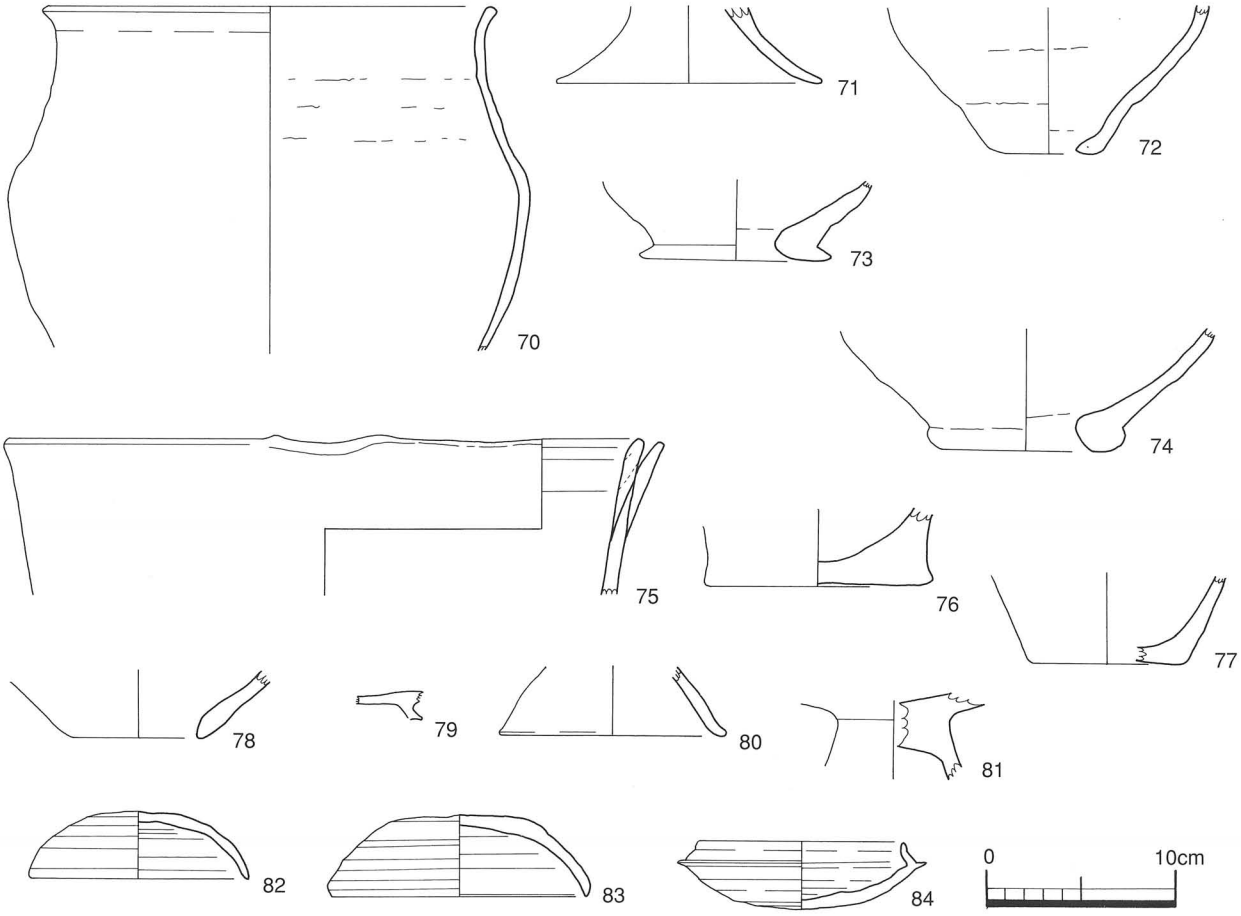
c　土坑

〈遺構（７・８図)〉　９号土坑は８号住居跡を切る。34号土坑は３号溝に切られる。長軸約4.0m、短軸約2.35mの平面が姫だるまに似た形状を呈す。壁面は傾斜を持つ段を有しながら立ち上がる。床面は長軸2.1m、短軸0.45mのプランとなりかなり狭くなる。35号土坑は８号住居跡を切る。長軸4.0mの細長い土坑である。床面は部分的に段を有するが埋土に層位は認められない。

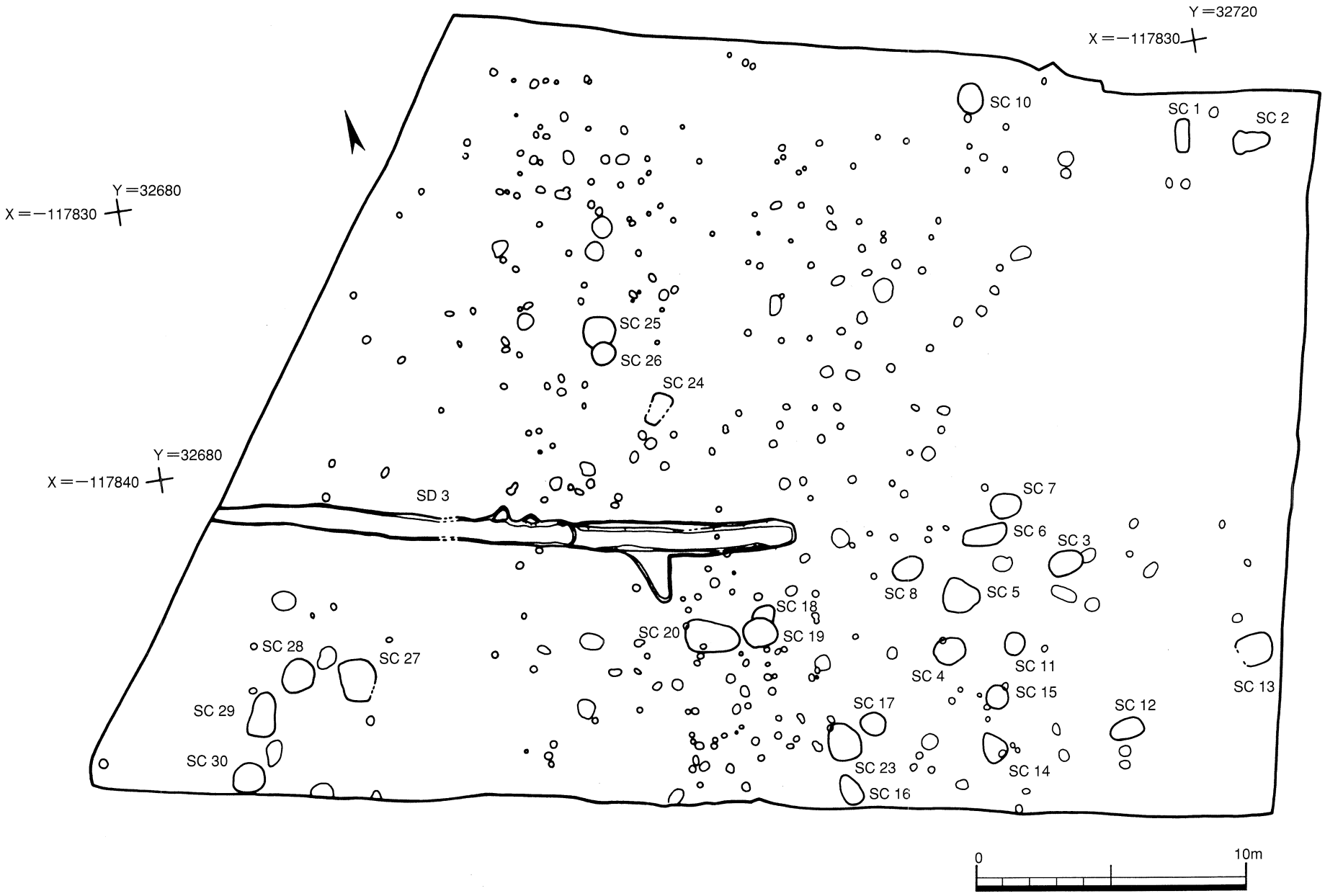
〈遺物（12図79～84)〉　79は９号土坑出土で須恵器の高台付杯である。82～84は35号土坑出土の須恵器である。

d　まとめ

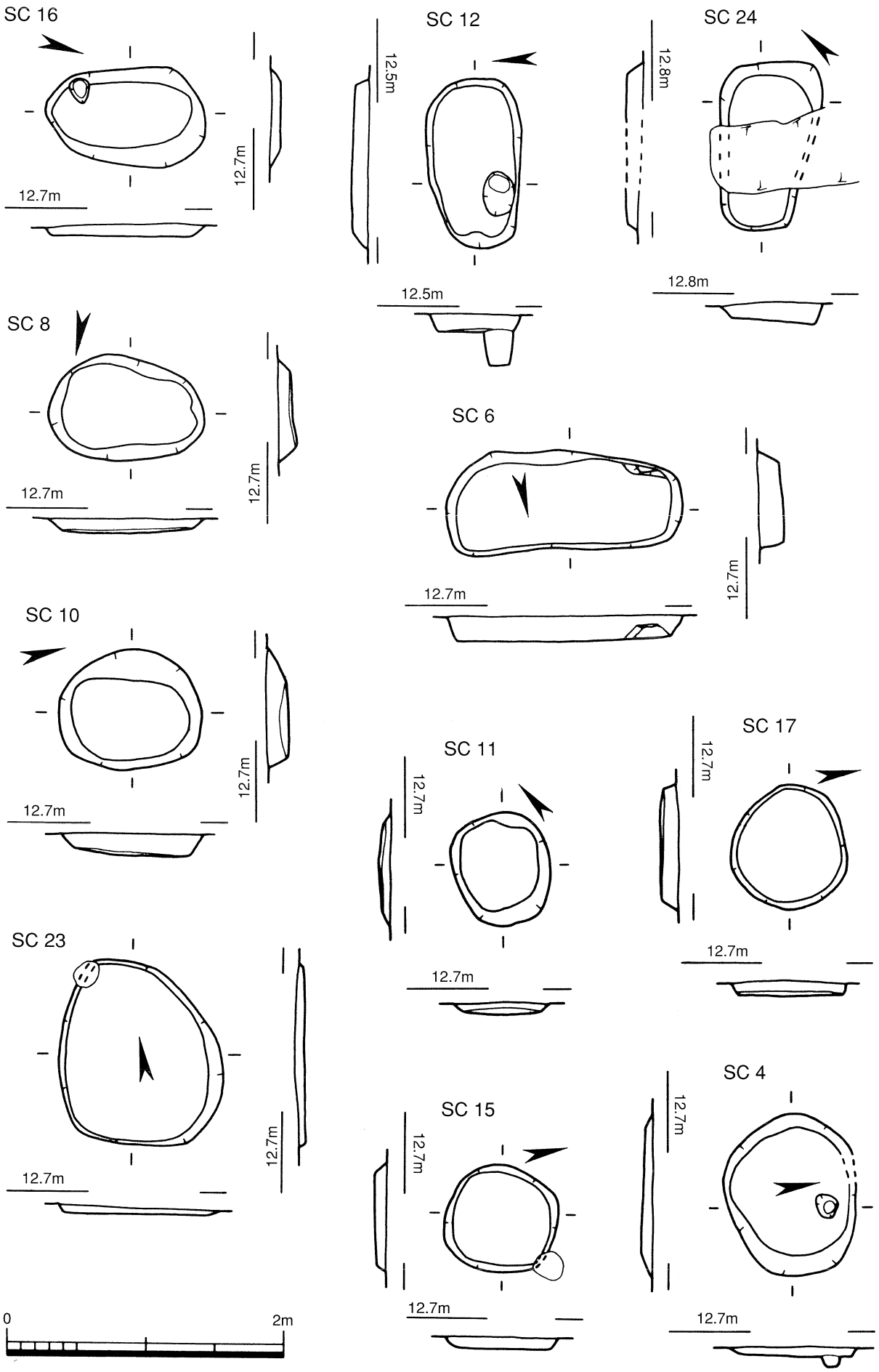
宮崎県内においては、この時期の須恵器と土師器との関係が未だ不明瞭である。そのため、遺構の時期については、土師器からの整合性をはかるには無理があると判断し、今回は出土須恵器のみで幅をもたせたうえで設定するに留めておきたい。まず、古く位置付けられるものとして５号溝のTK209型式の高坏(62）がある。次に隼上りⅠ型式の時期が11号住居跡、隼上りⅠ～隼上りⅡ型式にかけては８号住居跡とそれを切る35号土坑がその時期と思われる。隼上りⅢ型式の時期は10号住居跡で、５号溝もこの時期ま



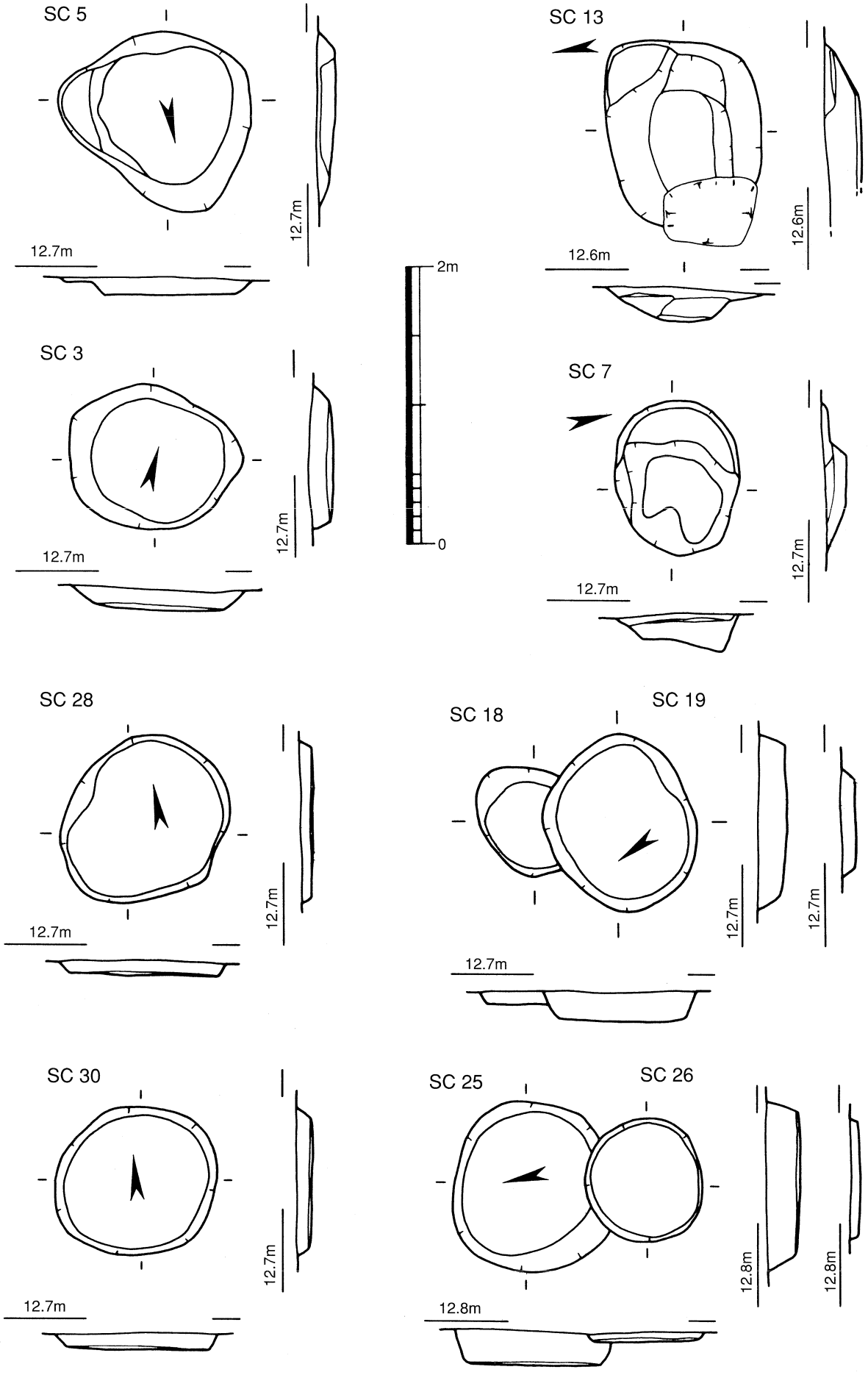
第12図　古墳時代出土遺物実測図（４）



第13図　中世遺構配置図

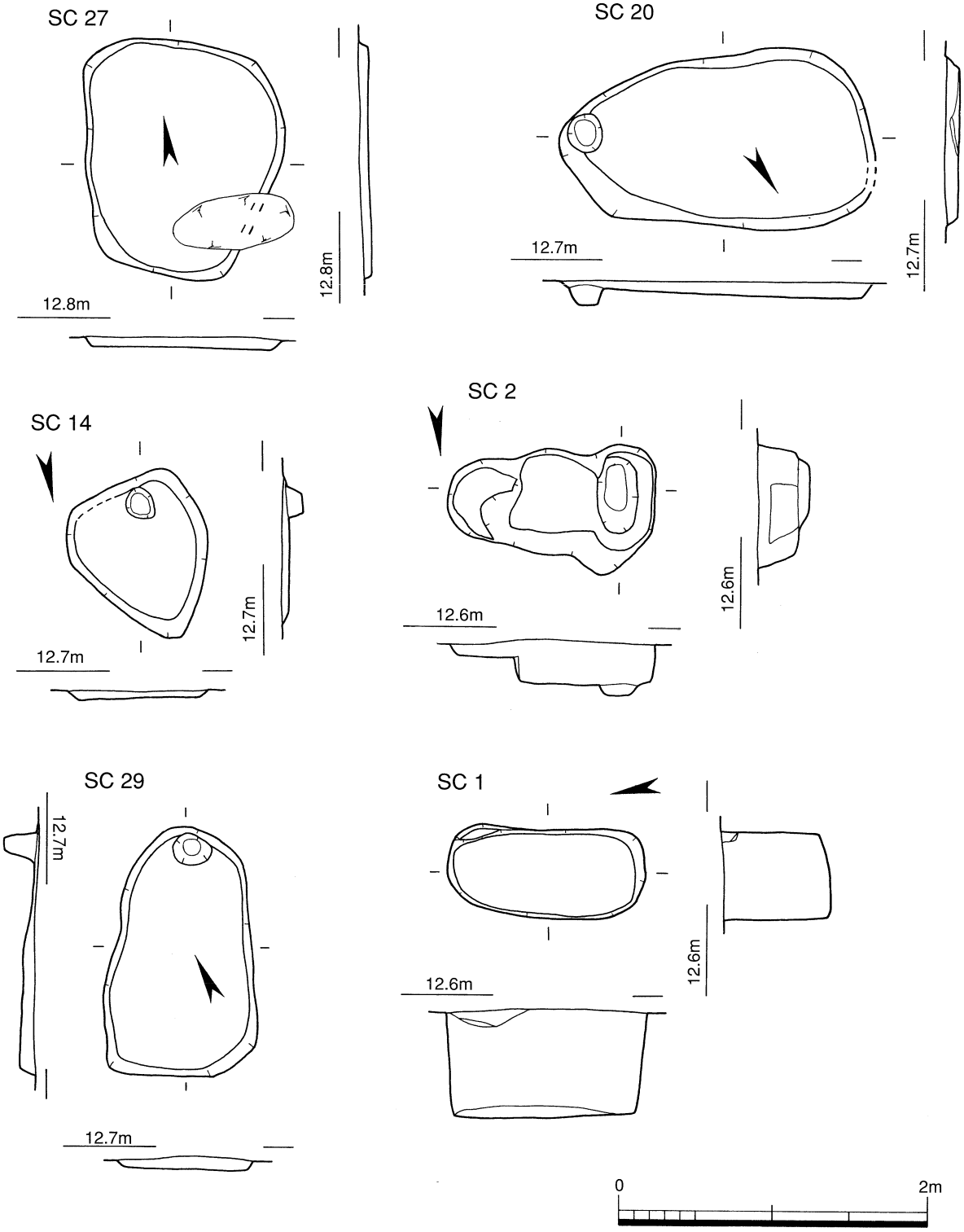

SC 16
12.7m
12.7m
SC 12
12.5m
12.5m
SC 24
12.8m
12.8m
SC 8
12.7m
12.7m
SC 6
12.7m
12.7m
SC 10
12.7m
12.7m
SC 11
12.7m
12.7m
SC 17
12.7m
12.7m
SC 23
12.7m
12.7m
SC 15
12.7m
12.7m
SC 4
12.7m
12.7m
0
2m

第14図　土坑実測図（1）

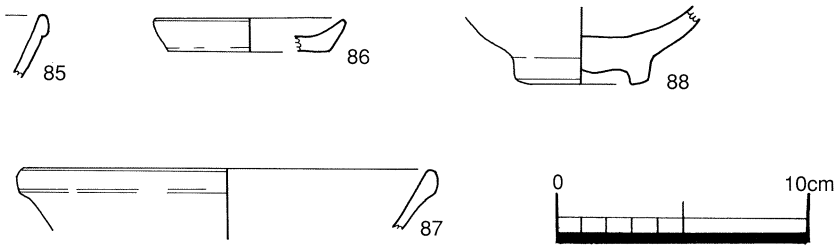

SC 5
12.7m
12.7m
SC 13
12.6m
12.6m
2m
0
SC 3
12.7m
12.7m
SC 7
12.7m
12.7m
SC 28
12.7m
12.7m
SC 18
SC 19
12.7m
12.7m
12.7m
SC 30
12.7m
12.7m
SC 25
SC 26
12.8m
12.8m
12.8m

第15図　土坑実測図（２）

で新しくなる可能性がある。隼上りⅢ～TK46型式の時期は2号住居跡が当てはまる。TK46からTK48型式にかけては6号住居跡や12号住居跡がその時期と思われるがやや新しくなる可能性もある。以上、出土遺構は概ねTK209型式～TK48型式の時期にとらえられる。遺構においては、住居跡における特徴として、6号住居跡や8号住居跡のように壁面が垂直に立ち上がらず外側に傾斜するものがあるということと、住居跡の床面から検出されたピットは位置的に柱穴となりうるものも含めてそのほとんどが深さ20㎝前後で浅く機能的な面も含めて疑いたくなるようなものが多いということの2点をあげておく。



第16図　土坑実測図（3）



第17図　中世出土遺物実測図

（2）中世の調査

a　溝状遺構

〈遺構（13図）〉　3号溝のみである。6号住居跡及び34号土坑を切る。幅0.5～1.5mを計り、主軸は東西方向で調査区よりも西側に延びる。ただ、西側ほど後世の削平により溝の幅が狭くさらに浅くなっている。深さは深いところで0.3m前後である。

b　土坑

〈遺構（14～16図）〉　1号土坑は土壙墓である。長軸方位はN-10°-Wで、長軸1.39m、短軸0.56mのプランである。壁面は四方とも約87°の傾斜でほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦であるが、厚さ1cmほどの黄白色粘土を床面全体に貼り付けている。埋土や床面の状況からは、木棺の痕跡や粘土に被われた痕跡もなく直葬かもしれない。副葬品はない。

〈遺物（17図85～88）〉　85は玉縁状の口縁を有する白磁で3号土坑からしゅつどした。86は糸切り底の小皿で25号土坑から出土した。87は6号土坑から出土した須恵質の片口鉢である。

c　その他

ピット群が検出された。ピットの規模は径10～20cmがほとんどで小規模である。掘立柱建物跡が在ったと思われるが規則性を持って並ぶものは無かった。黒灰色粘性土（白色粒と赤色粒が混じる）を埋土とするピットから龍泉窯系の青磁？（17図88）が出土した。

d　まとめ

遺構はほとんどが浅く埋土の層位は単純である。埋土は遺構ごとに暗灰黒色粘性土と暗灰褐色粘性土と黒灰色粘性土（白色粒と赤色粒が混じる）に分けられる。暗灰黒色粘性土と暗灰褐色粘性土からは12世紀代の遺物が出土し、黒灰色粘性土（白色粒と赤色粒が混じる）からは13世紀代の遺物が出土している。3～8、10～13、15～17、23、24号の各土坑が前者で、3号溝と1、2、14、18～21、25～30号の各土坑（土壙）が後者であるが一概ではない。

（3）近世の調査

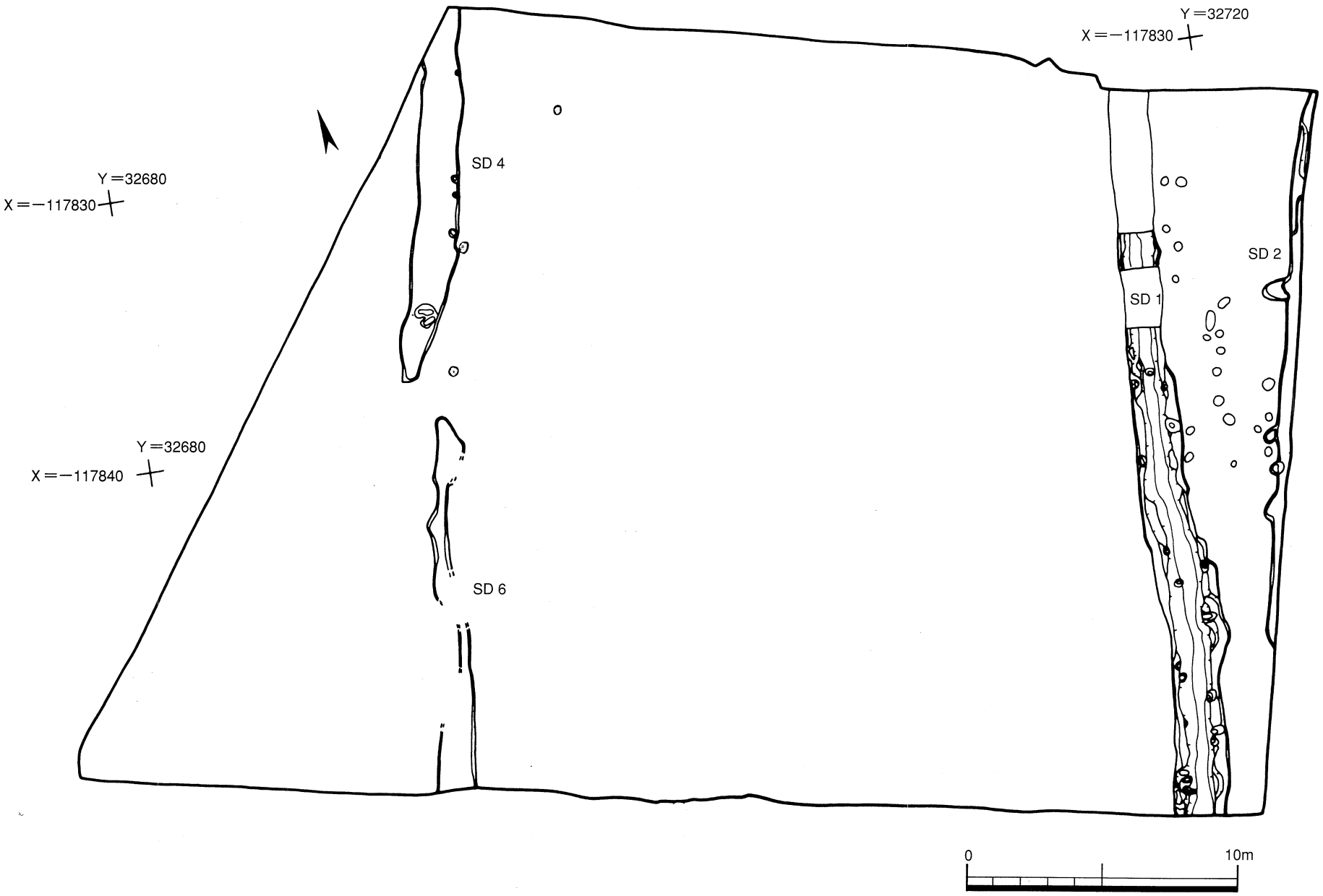
a　溝状遺構

〈遺構（18図）〉　1号溝は1号住居跡と4号住居跡を切る。幅約2.0m前後、方位はほぼ南北方向で調査区外にまっすぐ延びる。壁面は両側に部分的ではあるがテラス状の段を有し立ち上がる。床面は幅0.5mで狭い。遺構検出面から床面まで約0.7m前後で床面の海抜高は北側よりも南側が低い。2号溝は東側が調査区外で全体形はわからない。4号溝と6号溝は後世の削平により非常に浅くなっているものと思われ一連の遺構と考えられる。

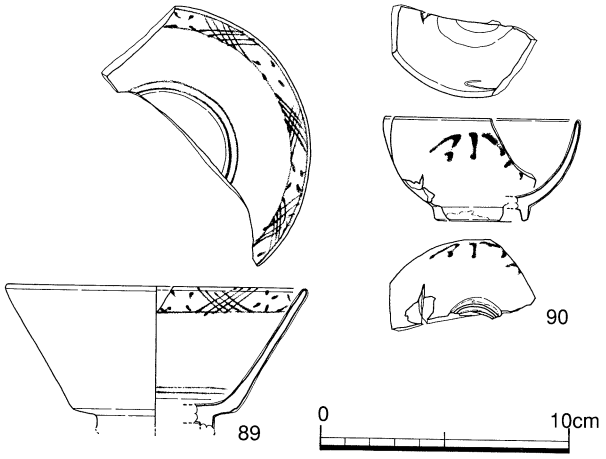
〈遺物（19図､89･90）〉　89は1号溝床面で出土した18世紀中頃の青磁染付碗で、見込みと竹笹文を施す。90は2号溝で出土した染付の小杯である。

b　まとめ

1号溝と4、6号溝の間隔は約25mで、同一方向に並行して延びている。しかも南北に軸を採っており区画性の強い遺構であるといえる。



第18図　近世遺構配置図



第19図　近世出土遺物実測図

最後に、調査ならびに整理にあたり、開発主である[redacted]をはじめ調査地周辺の方々、さらには柳沢一雄（宮崎大学教授）、大橋康二（佐賀県文化財課）、面高哲郎・石川悦雄・谷口武範・和田理啓（宮崎県埋蔵文化財センター）、吉本正典・松林豊樹（宮崎県文化課）、永友良典（県立妻高等学校）の各諸氏にはご協力を頂き、記して感謝申し上げます。

参考文献

宮崎県教育委員会　『学頭遺跡・八児遺跡』　1996
福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告８』　1986
福岡県教育委員会　『塚堂遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集　1984
増田一裕　「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』19号　1995
山田邦和　「飛鳥・白鳳時代須恵器の諸問題」『古代文化』　第40巻第６号　古代学協会　1988
高橋徹・小林昭彦　「九州須恵器研究の課題」『古代文化』　第42巻第４号　古代学協会　1990
菱田哲郎　「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』　第69巻第３号　京都大学文学部内史学研究会　1986
富田好久　「古代における炉とカマドの変遷」『末永先生米寿記念献呈論文集』　末永先生米寿記念会　1985
宮崎市教育委員会　『浄土江遺跡』　宮崎市文化財調査報告書第６集　1981
岡本武憲　「各地の土器様相　九州南部」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会　1995
山本信夫　「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会　1995
新富町教育委員会　『上薗遺跡Ｆ地区　溜水第２遺跡』　新富町文化財調査報告書第18集　1995
中野雄二　「波佐見町内古窯跡群の調査成果」『波佐見青磁展・くらわんか展』世界の博覧会波佐見町運営委員会　1996

表４　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	種別	器形	法量（mm）			調整等		備考
						口径	低径	器高	外側	内側	
1	9	—	SA1	土師器	甕	152	—	—	ナデ	ナデ	
2	9	—	SA1	土師器	甕	142	—	—	ナデ、粘土紐痕跡	ナデ	
3	9	—	SA2	須恵器	杯蓋	104	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
4	9	—	SA2	土師器	杯身	118	—	38	ナデ	ナデ	
5	9	—	SA2	土師器	杯蓋	118	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
6	9	—	SA2	土師器	有脚鉢？	—	104	—	ナデ	ナデ	
7	9	—	SA2	土師器	甕	147	—	—	ナデ	ナデ	
8	9	—	SA2	土師器	甕	148	—	—	ナデ	ナデ	
9	9	7	SA2	土師器	鉢	120	72	106	ヘラナデ	ヘラナデ	
10	9	7	SA2	土師器	鉢	241	86	195	粘土紐痕跡	粘土紐痕跡	
11	9	—	SA2	土師器	甑	—	82	—	ナデ	ナデ	
12	9	—	SA3	土師器	壺？	173	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
13	9	7	SA4	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	
14	9	—	SA5	土師器	甕	140	—	—	ナデ	ナデ	
15	9	—	SA5	土師器	甕	—	102	—	ナデ	ナデ	
16	9	7	SA6	須恵器	杯蓋	108	—	25	ヨコナデ	ヨコナデ	
17	9	7	SA6	土師器	杯蓋	116	—	23	ヨコナデ	ヨコナデ	
18	9	7	SA6	土師器	杯身	108	—	38	ナデ	ナデ	
19	9	—	SA6	土師器	甕	168	—	—	ナデ	ナデ	
20	9	—	SA6	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	
21	9	—	SA6	土師器	甕	—	58	—	ヘラナデ	ナデ	
22	9	7	SA6	土師器	甕	—	86	—	ヘラナデ	ナデ	
23	9	—	SA6	土師器	有脚甕	—	86	—	ナデ	ナデ	
24	9	—	SA6	土師器	甕	—	57	—	ナデ	ナデ	
25	9	7	SA6	土師器	甑	—	—	—	ナデ	ナデ	
26	9	—	SA6	土師器	甑	—	38	—	ナデ	ナデ	

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	種別	器形	法量(mm)			調整等		備考
						口径	低径	器高	外側	内側	
28	10	8	SA8	須恵器	杯蓋	103	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
29	10	8	SA8	須恵器	杯蓋	115	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
30	10	—	SA8	土師器	甕	206	—	—	ナデ	ナデ	
31	10	8	SA8	土師器	甕	—	52	—	ナデ	ナデ	
32	10	8	SA10	土師器	杯蓋	114	45	45	ナデ	ナデ	
33	10	8	SA10	土師器	杯蓋	136	—	43	ナデ	ナデ	
34	10	—	SA10	土師器	甕	—	86	—	ナデ	ナデ	
35	10	—	SA10	土師器	甕	—	64	—	ナデ	ナデ	
36	10	—	SA10	土師器	甕	—	68	—	ナデ	ナデ	
37	10	8	SA10	土師器	甕	160	—	—	ナデ	ナデ	
38	10	8	SA10	土師器	甕	140	—	254	ナデ	粘土紐痕	
39	10	8	SA10	土師器	甕	146	56	200	ナデ	粘土紐痕	
42	10	—	SA11	須恵器	杯蓋	140	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
43	10	—	SA12	須恵器	杯蓋	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	
44	10	—	SA12	須恵器	杯身	156	106	41	ヘラ切り　ヨコナデ	ヨコナデ	
45	10	—	SA12	土師器	杯身	101	59	34	丁寧なナデ	ナデ	
46	10	8	SA12	土師器	埦	101	—	43	ヨコナデ	ナデ	
47	10	—	SA12	土師器	皿	194	72	52	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
48	10	—	SA12	土師器	甕	124	—	—	ナデ	ナデ	
49	10	—	SA12	土師器	甕	170	—	—	ナデ	ナデ	
50	10	—	SA12	土師器	甕	156	—	—	ナデ　粘土紐痕	ナデ　粘土紐痕	
51	10	—	SA12	土師器	甕	152	—	—	粘土紐痕	粘土紐痕	
52	11	—	SA12	土師器	鉢	172	—	—	ヘラナデ　粘土紐痕	粘土紐痕	
53	11	—	SA12	土師器	甕	172	—	—	ナデ	ナデ	
54	11	8	SA12	土師器	甕	178	—	—	ヘラナデ	ナデ	
55	11	—	SA12	土師器	甕	—	100	—	ナデ	ナデ	
56	11	—	SA12	土師器	甕	—	95	—	荒いヘラナデ	ナデ	
57	11	—	SA12	土師器	鉢	272	—	—	ナデ　粘土紐痕	ナデ　粘土紐痕	
58	11	—	SA12	土師器	鉢	—	107	—	ナデ	ナデ	
59	11	—	SA12	土師器	鉢	—	85	—	ナデ	ヘラナデ	
60	11	—	SA12	土師器	甑	—	108	—	ナデ	ナデ	
61	11	—	SA12	土師器	甑	—	92	—	荒いヘラナデ	ナデ	穿孔
62	11	8	SD5	須恵器	高坏	128	—	—	回転ヘラ削り　ヨコナデ	ヨコナデ	
63	11	—	SD5	土師器	甕	—	104	—	ナデ	ナデ	
64	11	—	SD5	土師器	甕	190	—	—	ナデ	ナデ	
65	11	—	SD5	土師器	甕	210	—	—	ナデ	ナデ　粘土紐痕	
66	11	—	SD5	土師器	甕	191	—	—	ナデ	ナデ　粘土紐痕	
67	11	8	SD5	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	
68	11	—	SD5	土師器	甕	—	68	—	ナデ	ナデ	
69	11	—	SD5	土師器	甕	—	52	—	ナデ	ナデ	
70	12	—	SD5	土師器	甕	230	—	—	ナデ		
71	12	—	SD5	土師器	高坏	—	140	—	ナデ	ナデ	
72	12	—	SD5	土師器	甑	—	32	—	ナデ　粘土紐痕	ナデ　粘土紐痕	
73	12	8	SD5	土師器	甑	—	73	—	ナデ	ナデ	
74	12	8	SD5	土師器	甑	—	70	—	ナデ	ナデ	
75	12	—	SD7	土師器	片口鉢	332	—	—	ナデ	ナデ	
76	12	—	SD7	土師器	鉢	—	118	—	ナデ	ナデ	
77	12	—	SD7	土師器	鉢	—	81	—	ナデ	ナデ	
78	12	—	SD7	土師器	甑	—	66	—	ナデ	ナデ	
79	12	—	SC9	須恵器	杯身	—	—	—	ナデ	ナデ	
80	12	—	SC31	土師器	高坏？	—	118	—	ミガキ	ナデ	
81	12	—	SC31	土師器	高坏	—	—	—	ナデ	ナデ	
82	12	8	SC35	須恵器	杯蓋	105	44	36	回転ヘラ削り　ヨコナデ	ヨコナデ	
83	12	8	SC35	須恵器	杯蓋	135	68	43	回転ヘラ削り　ヨコナデ	ヨコナデ	
84	12	—	SC35	須恵器	杯身	108	41	36	回転ヘラ削り　ヨコナデ	ヨコナデ	
85	17	—	SC3	白磁	碗	—	—	—	回転利用のナデ	回転利用のナデ	
86	17	—	SC25	土師器	小皿	74	14	63	ナデ　糸切り	ナデ	
87	17	—	SC6	須恵器	鉢	160	—	—	回転利用のナデ	回転利用のナデ	
88	17	—	ﾋﾟｯﾄ	青磁	碗	53	—	—	回転利用のナデ	回転利用のナデ	
89	19	8	SD1	青磁染付	碗	118	—	—		見込み　竹笹文	
90	19	—	SD2	染付	小杯	74	32	42	畳付施釉無竹文		

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土遺構	種別	器形	法量(mm)			材質	備考
						口径	低径	器高		
27	9	7	SA6	石器	敲石	—	48	25	砂岩	
40	10	—	SA10	石器	敲石	—	51	40	砂岩	
41	10	—	SA10	石製品	支脚	—	56	—	軽石	

図版 1

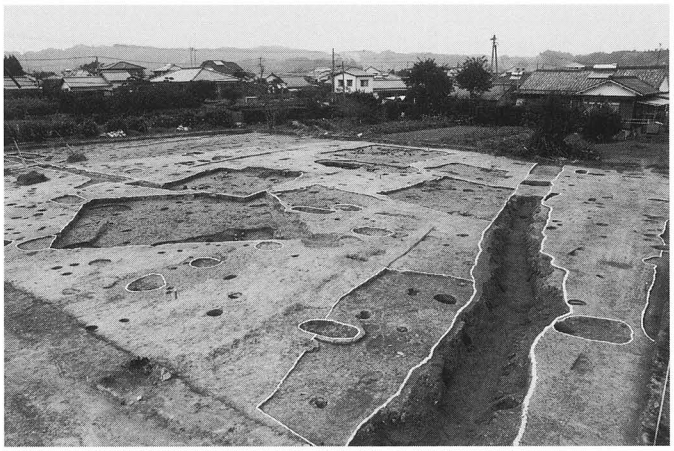
八児遺跡周辺

調査区全景

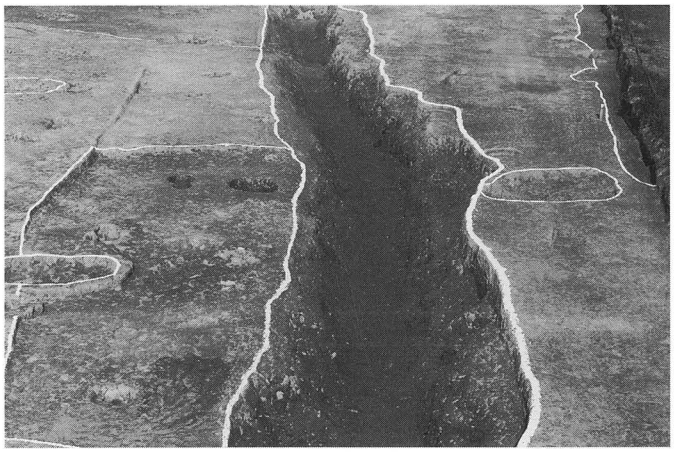
図版 2

調査前

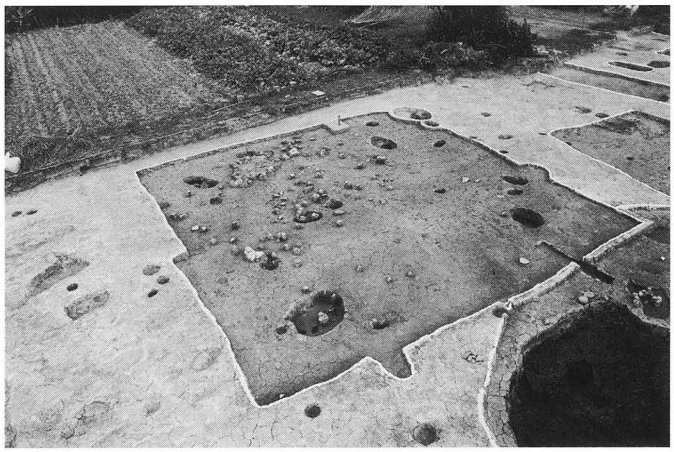
全景（南から）



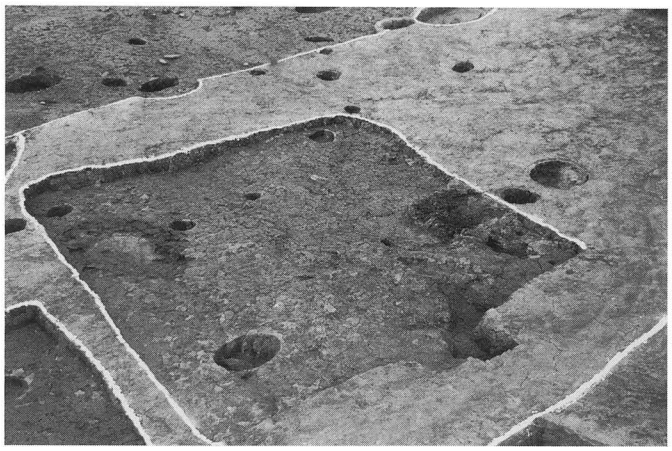
1 号住居跡と 1 号溝



2 号住居跡



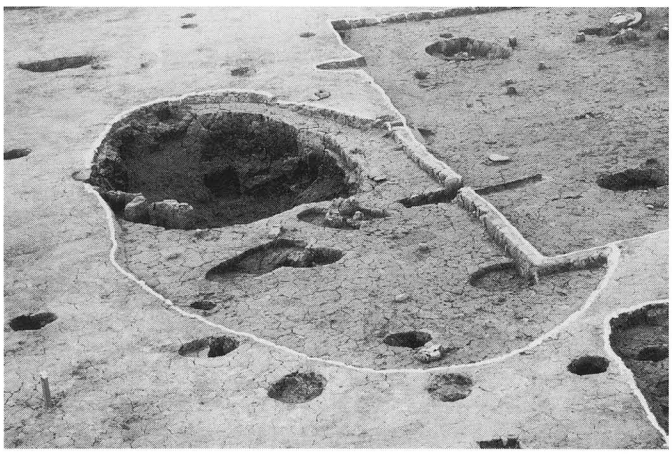
図版 3



3 号住居跡

4 号住居跡

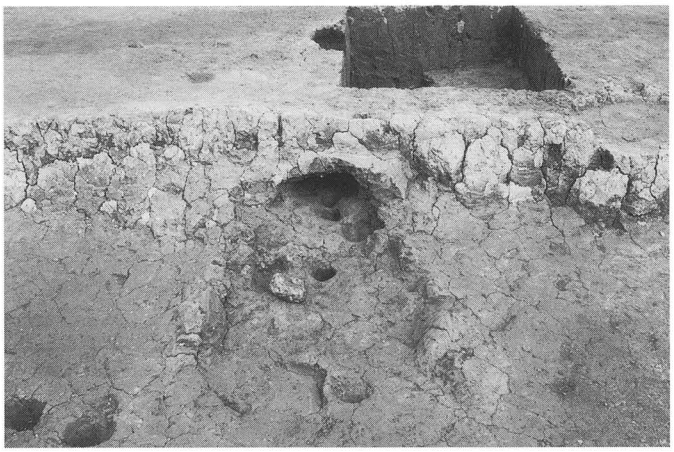
4 号住居埋甕



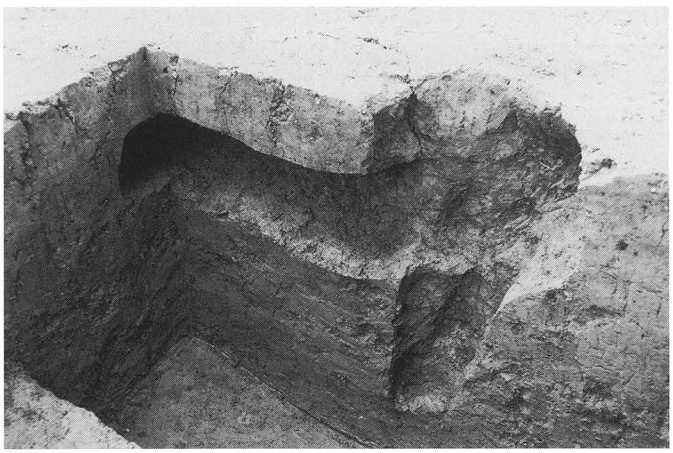
5 号住居跡

6 号住居跡

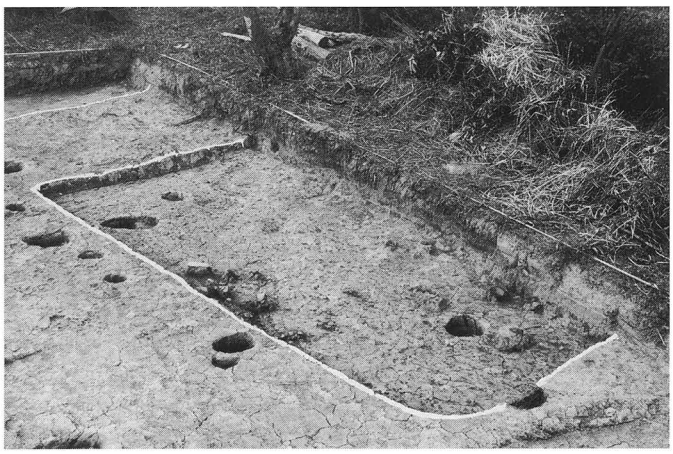
6 号住居カマド



6 号住居カマド煙道半截



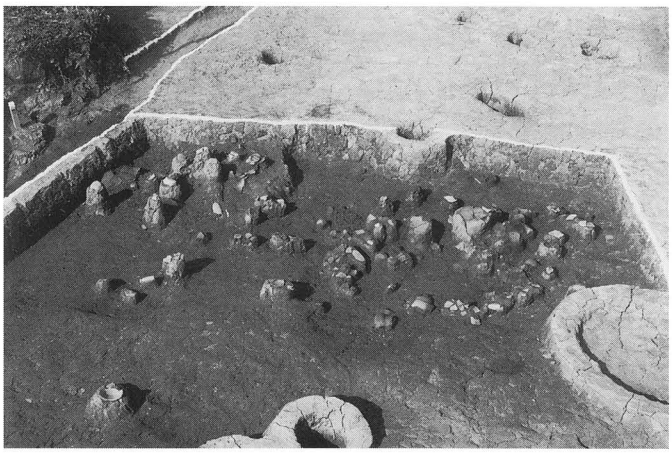
7 号住居跡



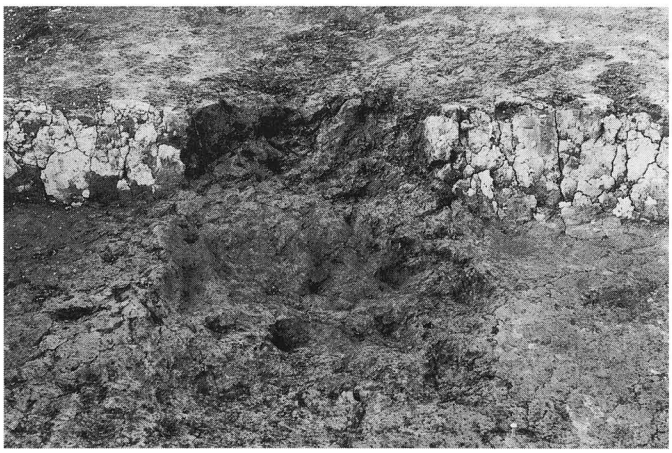
図版 5

8 号住居跡

8 号住居埋甕



10号住居跡



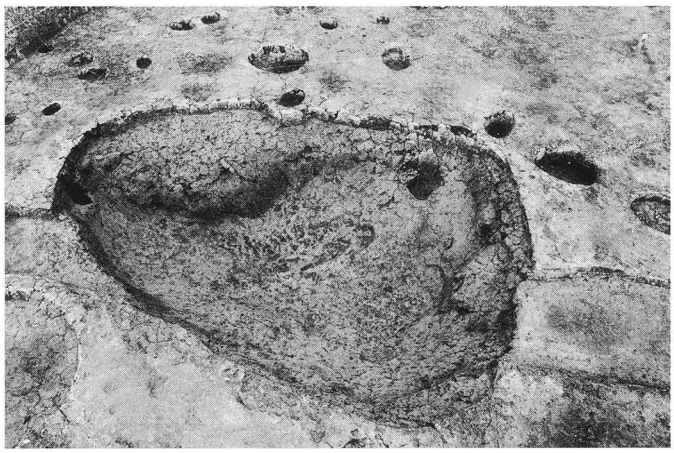
10号住居カマド完掘状況

12号住居跡

5 号溝

7 号溝

34号土坑

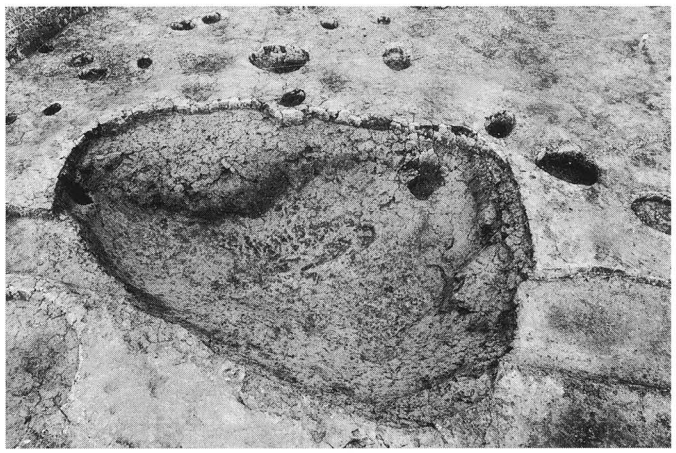


12号住居跡

5 号溝

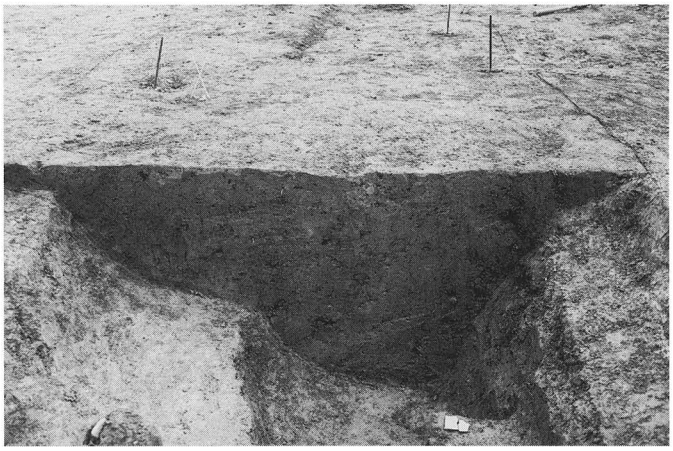
7 号溝

34号土坑

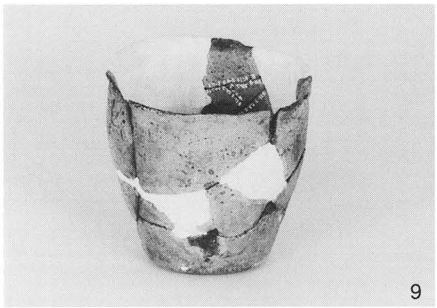


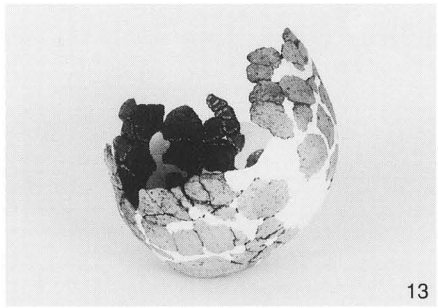
図版 7

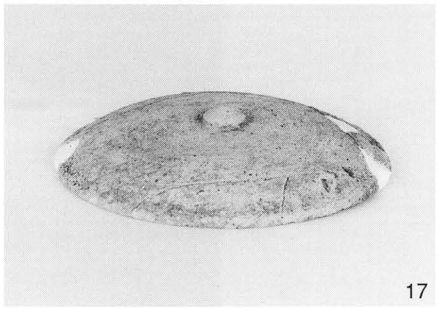
1 号土壙

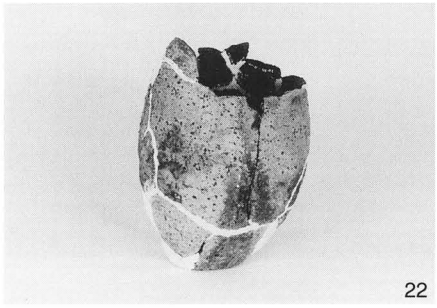


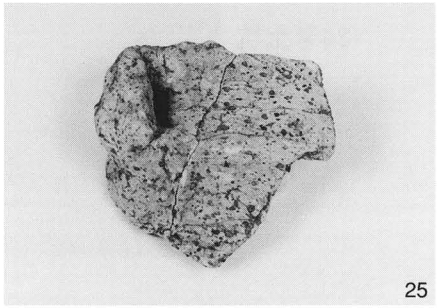
1 号溝断面（北から）

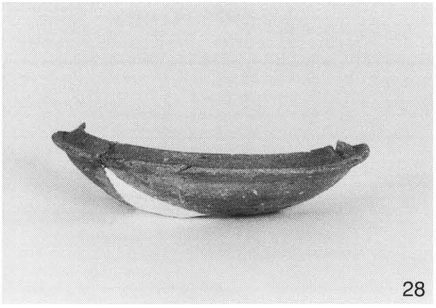


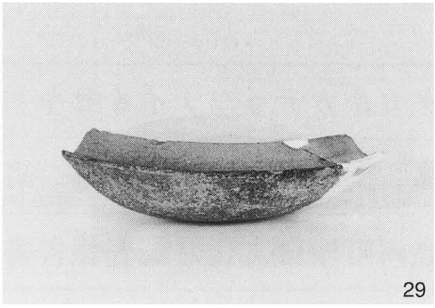


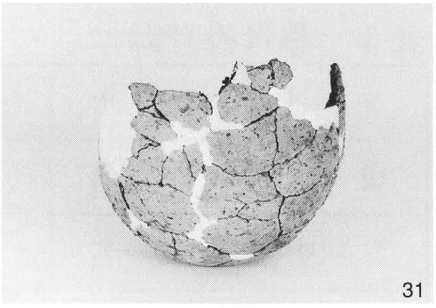


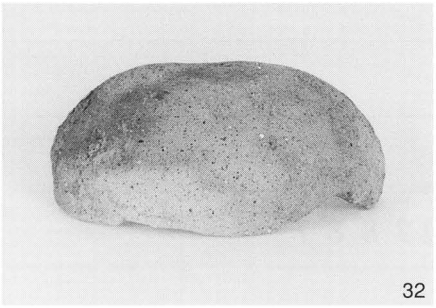


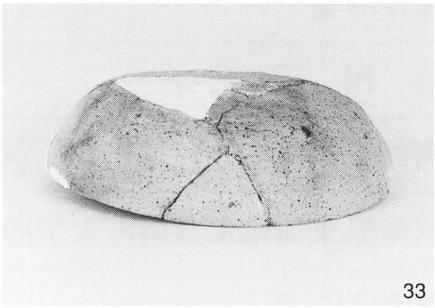


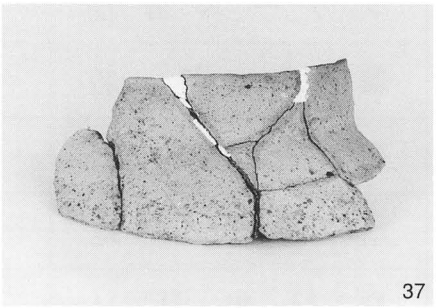

28

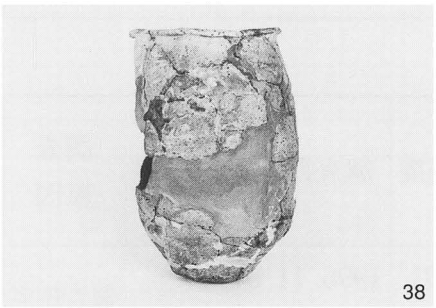

29

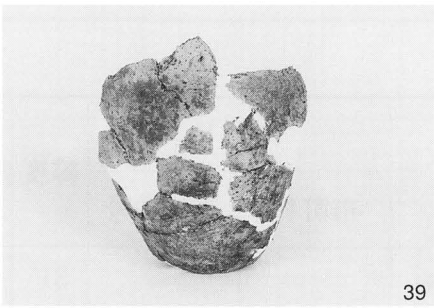

31

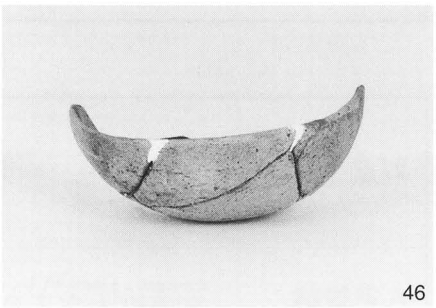

32

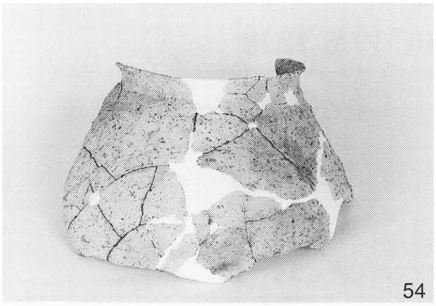

33

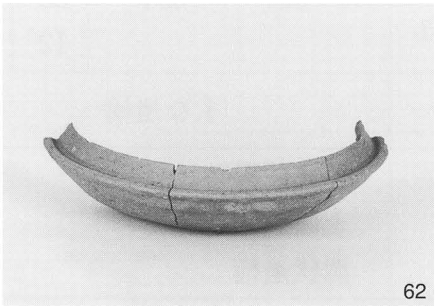

37

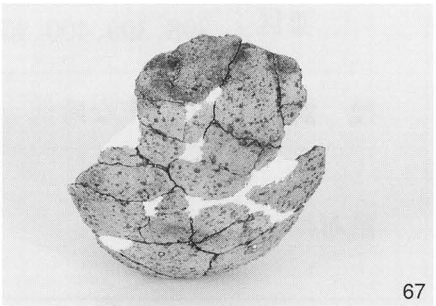

38

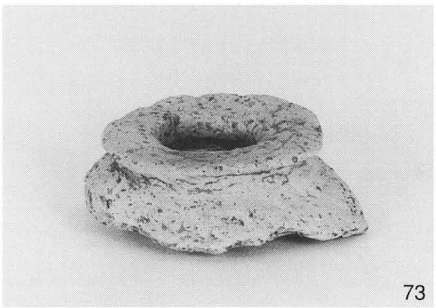

39

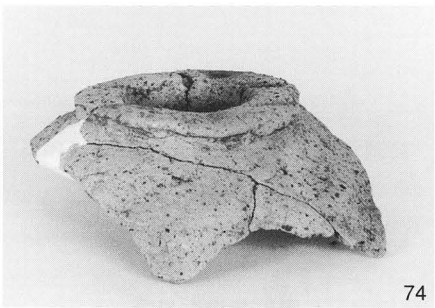

46

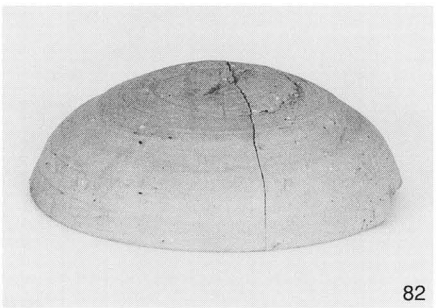

54

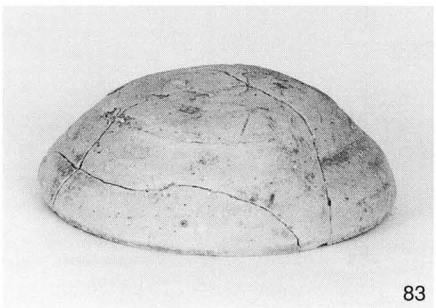

62

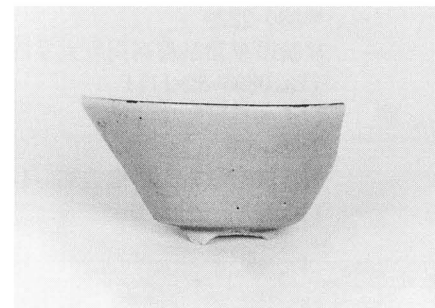

67


73


74


82


83



89

表５　報告書登録抄

フ　リ　ガ　ナ	タカオカチョウナイイセキ
書　　名	高　岡　町　内　遺　跡　Ⅵ
シ　リ　ー　ズ　名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シ　リ　ー　ズ　番　号	第１９集
編　集　者　名	島　田　正　浩
発　行　機　関	宮崎県高岡町教育委員会
所　在　地	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山２８８７
発　行　年　月　日	２０００.３

収蔵遺跡名	所　在　地	コード		緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八児遺跡 Ⅲ区	高岡町大字下倉永（たかおかちょうおおあざしもくらなが） 398、399、400、404-1	45－381	331	31° 55′ 12″	131° 20′ 46″	1996. 11. 5 ～ 1996. 12.18	1,200m²	個人住宅 兼病院建設
種　別	主な時代	主な遺構				主な遺物	特記事項	
散布地	古墳時代 中世 近世	竪穴住居跡12軒 土壙墓　土坑 溝状遺構				須恵器 土師器 染　付		

高岡町埋蔵文化財調査報告書第19集
高岡町内遺跡Ⅵ
2000年３月

編集・発行　高岡町教育委員会
〒880-2229
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
TEL.0895-82-1111
印　　刷　株式会社宮崎南印刷
〒880-0911
宮崎県宮崎市大字田吉350-1
TEL.0985-51-2745